

# 縁塚古墳群 I

—香川県大野原町丸井所在の群集墳の調査—



1991.3

大野原町教育委員会

## 発刊にあたって

このたび、緑塚古墳群の発掘調査の報告書を刊行いたしました。

今回の発掘調査は、四国横断自動車道工事が大野原町区で施行されるにあたり、横断道の盛土を町内緑塚地区から、採土（50万立方メートル）する計画がすすめられましたが、採土に先立って古墳の調査が行われたものであります。

このたびの調査区は、非常に広範囲に亘っており、発掘調査した古墳の数は、10基を越えており、出土物の数もおびただしいものがあります。

私どもは、今回発掘した遺物を、出来得る限り復元し、大切に保管して、後世に伝えるとともに、先人の創った文化に学び、町発展の活力にしたいと考えております。

最後に、本発掘調査にあたり、ご指導いただいた県教育委員会、並びに、地権者の方々に厚く御礼を申しあげて、あいさつといたします。

平成3年3月1日

大野原町長 薦田良知

## はじめに

郷土に残されている文化財は、ふるさとの先人達が残した貴重な文化遺産であります。これら文化財を大切に保護し、文化財に学んで、新しい文化を創造することは、現代に生きる私たちの責務であると思います。

このたび四国自動車横断道工事が、大野原町区で施行されるに当たり、高速道路の盛土を、縄塚一体から採土する計画がすすめられました。大野原町の東端部に位置する丸井地区縄塚一帯には、古墳遺跡のあることが伝承されていて、鎌子塚附近からは須恵器や装身器が出土した例があります。町教育委員会では、県教育委員会文化行政課のご指導とご援助を得て、昭和60年3月予備調査を実施し、遺構4基を確認するとともに、須恵基片多数を採取しました。この予備調査により大規模調査の必要なことが判明し、昭和60年8月から約1ヶ月余本調査をすすめてまいりました。調査が広範囲に及んだことと、調査期間も長期間を要したので、全体を3調査区に区分して実施しました。

第1調査区	5、10、11 号墳	自昭和60年8月至60年11月
第2調査区	7、12 号墳	自昭和61年1月至61年4月
第3調査区	1、2、3、4号墳 13、14、15 号墳	自昭和61年5月至61年11月

調査区一帯は、柿畠やみかん畠に開墾されていて、3号、13号、15号の3基は遺構の殆んどが破壊され、石室の基底石が残っていた古墳は、1号、2号、10号、11号、12号の5基で他は石室の掘形が残っているに過ぎなかった。しかし全体では非常に多数の遺物を検出することが出来て、本町の文化財の歴史に新たな1ページを加えることが出来ました。

本報告書は第1調査区の報告ですが、第2、第3調査区については、この報告書に引き続き報告する計画であります。

最後になりましたが、今回の発掘調査に当たって、終始熱心にご指導賜りました香川県教育委員会文化行政課（当時）中西昇先生はじめ、ご協力いただきました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月1日

大野原町教育委員会 教育長 藤川 美男

## 例　　言

1. 本書は、香川県三豊郡大野原町丸井・福田原に所在する縄塚古墳群の第1次発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は、大野原町教育委員会が調査主体となり、香川県教育委員会の職員の派遣を得て、昭和60年8月5日～11月3日の日程で実施した。

調査組織は下記のとおりである。(職名は昭和60年度のものである。)

調査担当 香川県教育委員会事務局文化行政課

技師 中西 异(転出・平成3年度綾南町立滝宮小学校教諭)

大野原町文化財保護協会

眞鍋和三

事務局 大野原町教育委員会事務局

教育長 藤川美男 教育課長 高木茂樹(転出)

教育課長 蓮田 力 教育課長 藤田 茂(転出) 課長補佐 高橋剛徳

課長補佐 守谷信雄(転出) 社教主事 渡辺久美子(転出)

主事補 森 賢児(転出)

発掘作業協力者

茨木義恵、合田春雄、岡田恒夫、岡田ヨシエ、茨木シズ子、

井上シズ子、大川愛子、茨木シゲノ

岡田 恵、高橋達忠、石井康幸(学生)、山田恒男(重機等)

3. 調査前及び発掘時の地形測量、調査区画設定は、有限会社片山設計に委託した。

4. 本書挿図中のレベル高はすべて海拔を表わす。また、方位は真北を示す。

5. 本書の執筆・編集は、中西が担当した。

6. 本書に使用した遺構・出土遺物の実測図は、現在香川県埋蔵文化財センター、出土遺物は大野原町教育委員会において保管している。

7. なお、出土遺物のうち、装飾品の一部と紡錘車の材質を、香川大学教育学部教授谷山穣氏に鑑定していただいたほか、調査の全般にわたって、下記の諸氏の御指導・御教示をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略)

渡部明夫、東原輝明、小西正行、眞鍋昌宏、岩橋孝、笛川龍一、片桐孝浩、西岡達哉、

松木敏三、藤籽史郎、北山健一郎、北山多佳子、齐藤賛一

## 目 次

第1章 立地と歴史的環境	1
第2章 調査の経緯	5
第3章 調査の結果	7
(1) 調査区の概要	7
(2) 5号墳	14
1 墳丘	14
2 石室	14
3 遺物の出土状況	17
4 出土遺物	18
5 武具	22
(3) 10号墳	23
1 墳丘及び周溝	23
2 石室	23
3 羨道・墓道	24
4 遺物の出土状況	29
5 玄室の出土遺物	29
6 羨道・周溝出土遺物	41
(4) 11号墳	49
1 墳丘	49
2 石室	49
3 遺物の出土状況	54
4 出土遺物	54
(5) N-6区土器窓	58
1 出土状況	58
2 出土遺物	58
(6) 土壙群	62
1 1号土壙	62
2 2号土壙	62
3 3号土壙	62
4 4号土壙	63
5 5号土壙	63
6 6号土壙	63

(7) 土器棺	67
(8) その他の遺構と遺物	68
1 溝状遺構	68
2 S-2区土器窪	69
3 その他	69
第4章 まとめ	70

## 挿 図 目 次

第1図 大野原町位置図	1
第2図 周辺の主要遺跡	2
第3図 赤岡山古墳群出土遺物実測図	3
第4図 第8地点の現状	5
第5図 調査区土層図(1)	9~10
第6図 調査区土層図(2)	11~12
第7図 緑塚古墳群第1調査区調査前地形図(グリッド配置図)	13
第8図 5号墳掘り形平面図	14
第9図 5号墳石室実測図	15~16
第10図 主要遺物出土状況図	17
第11図 5号墳石室内出土遺物実測図(1)	18
第12図 5号墳石室内出土遺物実測図(2)	19
第13図 5号墳石室内出土遺物実測図(3)	20
第14図 5号墳石室内出土遺物実測図(4)	21
第15図 5号墳石室内出土遺物実測図(5)	22
第16図 10号墳丘内遺構配置図	25~26
第17図 10号墳石室実測図	27~28
第18図 10号墳石室床面(下層)実測図	29
第19図 玄室側壁切石使用部分	29
第20図 10号墳主要遺物出土状況図	30
第21図 10号墳石室内出土遺物実測図(1)	32
第22図 10号墳石室内出土遺物実測図(2)	33
第23図 10号墳石室内出土遺物実測図(3)	34
第24図 10号墳石室内出土遺物実測図(4)	36
第25図 10号墳石室内出土遺物実測図(5)	37

第26図	10号墳石室内出土遺物実測図(6)	38
第27図	10号墳石室内出土遺物実測図(7)	39
第28図	10号墳石室内出土遺物実測図(8)	40
第29図	10号墳墓道出土遺物実測図	42
第30図	10号墳周溝土器溜出土遺物実測図(1)	44
第31図	10号墳周溝土器溜出土遺物実測図(2)	45
第32図	10号墳周溝土器溜出土遺物実測図(3)	47~48
第33図	11号墳石室実測図	51~52
第34図	11号墳主要遺物出土状況図	53
第35図	11号墳石室内出土遺物実測図(1)	55
第36図	11号墳石室内出土遺物実測図(2)	56
第37図	N-6区土器溜出土遺物実測図(1)	58
第38図	N-6区土器溜出土遺物実測図(2)	59
第39図	N-6区土器溜出土遺物実測図(3)	60
第40図	1号土壤実測図	62
第41図	2号土壤実測図	62
第42図	3号土壤実測図	63
第43図	6号土壤実測図	64
第44図	S-4区土器棺実測図	65~66
第45図	土器棺出土状況図	67
第46図	N-3区溝状遺構実測図	68
第47図	その他の出土遺物実測図	68

## 表 目 次

表1 詳細分布調査結果	6
-------------	---

## 図 版 目 次

図版1(1) 調査区遠景(北から)	73
(2) N区全景(南西から)	
(3) N区全景(北東から)	
図版2(1) 5号墳主体部検出状況	74
(2) 5号墳石室全景(南から)	

(3) 5号墳石室全景(南東から)	
図版3(1) 10号墳石室検出状況	75
(2) 10号墳周溝土層	
(3) 10号墳周溝土器窓	
図版4(1) 10号墳墓道	76
(2) 10号墳石室内遺物出土状況	
(3) 10号墳石室内遺物出土状況	
図版5(1) 10号墳玄門部遺物出土状況	77
(2) 10号墳石室全景(西から)	
(3) 同上(下層敷石検出状況)	
図版6(1) 10号石室基底石検出状況	78
(2) 10号墳玄室東側壁(敷石除去後)	
(3) 10号墳玄室東側壁(切石使用部分)	
図版7(1) 10号墳玄室西側壁	79
(2) 10号墳玄室奥壁	
(3) 10号墳競道西側壁	
図版8(1) 11号墳石室全景(西から)	80
(2) 11号墳墓道	
(3) 11号墳玄室内遺物出土状況	
図版9(1) 11号墳石室全景(南東から)	81
(2) 11号墳掘り形(5号墳を遠望)	
(3) N-6区土器窓	
図版10(1) 1号土壤(北から)	82
(2) 2号土壤(東から)	
(3) 6号土壤(北西から)	
図版11(1) 土器棺検出状況	83
(2) 同上(埋土除去後)	
(3) N-3区溝状遺構	
図版12 出土遺物(1)	84
図版13 出土遺物(2)	85
図版14 出土遺物(3)	86
図版15 出土遺物(4)	87
図版16 出土遺物(5)	88
図版17 出土遺物(6)	89



綠塚10号墳 発掘調査作業風景

# 第1章 立地と歴史的環境

大野原町は、香川県の西端に位置し、隣接する豊浜町とともに県境を隔てて、愛媛県川之江市と接している。

阿讃山脈を源流とした作田川は、町域のほぼ中央を北上して三豊平野に出たところで扇状地を形成し、さらに北上して観音寺市母神山塊の南約0.7km附近で町域をはずれ、北西に向きを変えて燧灘に至る。

大野原町は、南半分の山間部を除く平野部集落域の大半がこの作田川扇状地上に立地している。

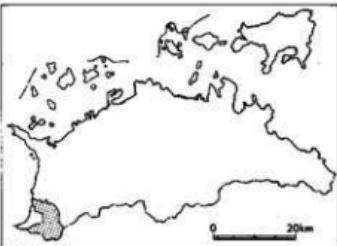
縁塚古墳群第2図①は、阿讃山脈西端の高峰雲辺寺山（標高911m）から北北西に延びる尾根の一支脈の末端丘陵上、標高50～60m附近に立地している。当該地からはほぼ東北2kmにある、古墳時代後期の群集墳が立地する母神山塊（最高峰92.1m）から、さらに三豊平野のほぼ全域を見渡し、西は眼下の作田川扇状地から燧灘、遙かに愛媛県高柳半島をも遠望することができる。

大野原町内には現在までのところ、旧石器時代の遺跡は確認されていない。ただ、観音寺市一ノ谷遺跡群で、流れ込みではあるが国府型ナイフ、宮田山型ナイフ等4点出土していることから、丘陵地帯で旧石器時代の遺跡が発見される可能性がある。

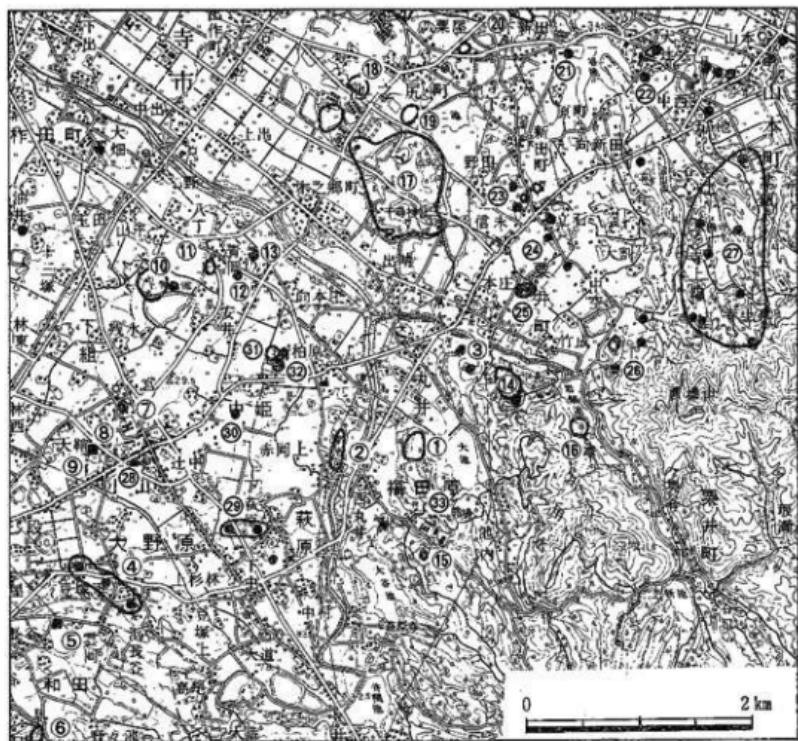
縄文時代についても、豊浜町で前期の院内貝塚⑥が知られる程度である。

弥生時代には、大野原町安井に所在する中姫遺跡①が知られる。前期末の、頸部に13条のヘラ描き平行沈線文を施した完形の壺形土器が1点出土しているが、耕作中の偶然の発見のため、遺跡の実態は不明である。他に近隣では、縁塚古墳群の東1.5kmに所在する中期後半の土器散布地の岩鍋遺跡⑦、2km北東の菩提山山麓で明治時代に細形銅劍3口を出土した藤の谷遺跡⑧が知られる程度である。縁塚古墳群の試掘調査・本調査（第1次）でも石磧・打製石包丁が出土したほか、後期末の壺形土器も出土していることから、今後町内での新たな遺跡の発見が予想される。また近年、四国横断自動車道建設・園場整備等の大規模開発に伴い、隣接の観音寺市で平野部の微高地から低丘陵部にかけて、一ノ谷遺跡群、長砂古遺跡⑨、久染遺跡⑩、向井西の岡遺跡⑪等の発掘調査が実施され、弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落が確認されている。

現在確認されている大野原町内最古の古墳は、縁塚古墳群から作田川を挟んで西岸沿いの独立丘陵上に立地する赤岡山3号墳である。赤岡山古墳群⑫はかつて20数基の円墳により構成されていたが、戦後の開墾により、現在はこの3号墳がかろうじて原形をとどめている。直径24m、高さ3mを測り、墳丘には河原石積み4段の葺石が巡っている。昭和25年に発掘され、河原石積み



第1図 大野原町位置図



第2図 周辺の主要遺跡

- |          |           |          |
|----------|-----------|----------|
| ① 緑塚古墳群  | ⑪ 安井庵寺    | ㉓ 幸助蔵古墳  |
| ② 赤岡山古墳群 | ⑫ 百々古墳    | ㉔ 立石古墳   |
| ③ 平岡古墳   | ⑭ 藤目山古墳   | ㉕ 上野古墳群  |
| ④ 豆塚古墳群  | ㉖ 竜王山古墳   | ㉖ 藤の谷遺跡  |
| ⑤ 雲岡古墳   | ㉗ 岩鍋遺跡    | ㉗ 辻古窯址群  |
| ⑥ 院内貝塚   | ㉘ 母神山古墳群  | ㉙ 役場南側古墳 |
| ⑦ 振貸塚古墳  | ㉙ 長砂古遺跡   | ㉚ 西の後古墳群 |
| ⑧ 角塚古墳   | ㉚ 久染遺跡    | ㉛ 宗像古墳   |
| ⑨ 平塚古墳   | ㉛ 向井西の岡遺跡 | ㉜ 小森塚古墳群 |
| ⑩ 柞田八丁遺跡 | ㉜ 青塚古墳    | ㉝ 道下古墳群  |
| ㉑ 中姫遺跡   | ㉝ 辻西遺跡    | ㉞ 福田原古墳  |

小形堅穴式石室が墳頂南寄りに検出された。変形神獸鏡片、管玉などが出土した。墳頂北寄りにも石室があるといわれる。以上のことから、赤岡山3号墳は三豊平野南部（財田川以南）で5世紀中葉と推定されている帆立貝式前方後円墳の觀音寺市青塚古墳<sup>④</sup>に次いで古い5世紀後半代と推定されている。

赤岡山古墳群は20数基の殆どが開墾により破壊され、消滅したが、3号墳以外に12基の位置が確認されている。これらはいずれも横穴式石室であったといわれる。須恵器、鐵鎌、玉類が出土しており（第3図）、6世紀全般にわたり築造され続けていたようである。

群集墳の盛行する6世紀後半から7世紀代にかけては、町内外の近隣地域にお

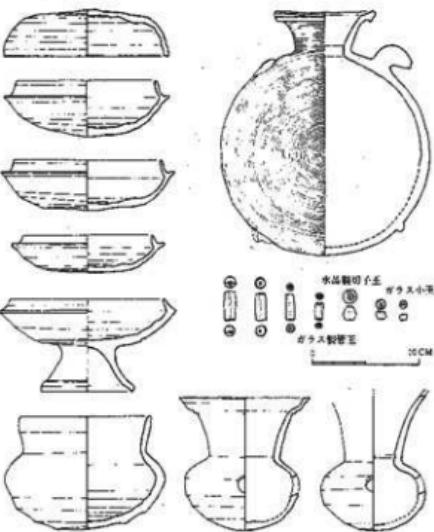
いても各所で数多くの古墳群が形成されている。その大半は実態が不明のまま、近世以降の新田開発及び戦後の圃場整備事業等により消滅している。その中でかろうじて事前に発掘調査が実施され、記録の残されたのが、扁状地上に立地する役場南側古墳<sup>⑤</sup>、西の後古墳群<sup>⑥</sup>、宗像古墳<sup>⑦</sup>、小森塚古墳群<sup>⑧</sup>、道下古墳群<sup>⑨</sup>などである。いずれも玄室基底石程度しか残らないほど削平を受けていた。おむね6世紀後半から7世紀前半にかけての構造と思われる。

これらの群集墳とほぼ平行して、作田川扁状地のほぼ中央部に、当地域の盟主的な首長墓と思われる巨石墳の榎賀塚古墳<sup>⑩</sup>、平塚古墳<sup>⑪</sup>、角塚古墳<sup>⑫</sup>が、6世紀後半から7世紀中葉にかけて近接した位置に築かれる。以上は包括して大野原古墳群と総称される。

他に群集墳としては、緑塚古墳群の北東1kmの谷を隔てた尾根上に立地する藤目山古墳群<sup>⑬</sup>、作田川を隔てて北へ2kmの丘陵全域に立地する母神山古墳群<sup>⑭</sup>が知られる。後者は鎌子塚古墳、ひさご塚古墳を盟主墳として約70基を擁する。

その後は、7世紀末に築造された豊浜町雲岡古墳<sup>⑮</sup>が確認されている程度で、古墳の築造は途絶える。

代わって、奈良時代以降の仏教の振興により、当地にも安井廃寺<sup>⑯</sup>が建立される。正式な発掘調査が実施されていないため、伽藍配置などは全く不明であるが、寺域推定地付近ではしばしば



第3図 赤岡山古墳群出土遺物実測図

古瓦が採集されている。出土した四重弧文軒平瓦、八葉单弁蓮華文軒丸瓦などから、奈良時代末～平安時代の建立と推察される。

以上が、大野原町及びその周辺の縄文時代から古代にかけての遺跡の概略である。

註(1) 調査担当者からの情報による。

註(2) 『大野原町の文化財』大野原町 1984.3

註(3) 石川巖『小森塚古墳調査報告』大野原町教育委員会 1974.3

註(4) 國木健司『雲岡古墳発掘調査報告書』豊浜町教育委員会 1987.9

## 第2章 調査の経緯

昭和59年9月、大野原町丸井地区の丘陵上約14haが、四国横断自動車道（善通寺～川之江間）の建設工事が本格化したのに伴い、道路部分盛土用の土砂採取の対象地となり、跡地利用の計画が発表された。

当該地域は昭和初期及び終戦直後に開墾され、蜜柑・柿などの果樹園になって現在に至る。

今回の開発にあたって、当該地域が「縁塚」という地名をもち、開墾時に、石材や須恵器が出土したという地元住民の情報があることから、地域内に古墳が存在する可能性が高くなった。町教育委員会では、県教育委員会職員の派遣を得て、当該地域内の詳細分布調査を実施することになった。

調査は、昭和60年1月16、23～25の4日間実施し、現地踏査・地元住民への聞き取りを行った結果、住民の開墾時の記憶・石室用材の散乱（再利用）状況（第4図）、須恵器片の散布状況などから、少なくとも9基の古墳が存在することが明らかになった（表1）。開墾による地形の変更のために、現在ではいずれも墳丘は失われ、主体部も破壊されていることが予想されることから、地元住民の記憶だけでは正確な位置をおさえることが困難なため、同年3月4～7日、12日の5日間、県教育委員会職員の指導のもと、分布調査でおさえた1～9号墳推定地を中心として試掘調査を実施した。果樹を避けながらの小型重機による調査により、以下の成果を上げることができた。

- 1～3号墳推定地（以下推定地を省く）では、遺構は検出できなかったが、1・3号墳のはば中間地点で石室床面の玉砂利と思われる礫群を検出した。記憶による位置の測定には誤差があると思われ、これが何号墳に該当するのかは不明である。他の2基についても、本調査の段階で再度精査することにした。
- 4号墳は「かんす塚」と呼ばれていたことから古墳が所在したことはほぼ明らかである。石室掘り形と思われる落ち込みと、周溝と思われる深い落ち込みを検出し、後者から須恵器高环脚が出土した。
- 5号墳は倒し字形の尾根の基部と推定されていたが、試掘では小規模のいびつな小土坑を検出するに留まり、むしろ尾根の屈曲点で玉砂利や石材を積み上げた所で石室掘り形を検出したことから、後者の位置に確認した。



第4図 第8地点の現状

- 7号墳は尾根の頂上で石室掘り形を検出し、須恵器片と勾玉1玉の出土をみた。
- 8号墳では周囲が0.5~1m地下げされているため、墳丘が残っているように一段高く見えるが、南縁辺部に多量の須恵器片を含む拳大円謫の集積があり、石材を近くの石垣に利用していることなどから主体部が破壊されていることが予想された。トレンチ内でも耕作土下すぐに地山が現われ、遺構は検出できなかったため、掘り形まで完全に削平されたものと判断した。
- 9号は地表から1.3mの深さまで造成による擾乱のため遺構を検出することができず、消滅したものと判断した。
- 以上の結果、1~4号墳の付近、5号墳の所在する倒L字形の尾根、7号墳の所在する丘陵頂上部分で本調査が必要という結論に至った。なお、6号墳は工事による直接の影響を受けないため、試掘の対象から外した。

町教育委員会は試掘の結果をもとに県教育委員会と協議した結果、県教育委員会職員の派遣・指導のもと、採土工程上最も急がれる5号墳の所在する尾根を第1調査区として、同年8月5日、第1次調査を開始した。調査は実働61日を費し、11月3日に終了した。

調査では効率化を図るため、調査前・調査後の地形測量及びグリッド設定は業者委託とし、表土除去作業は小型重機を使用し、調査員が立ち会った。

表1 詳細分布調査結果

	墳丘、石室（聞き取りによる）	遺物	現状	備考
1	横穴式石室（東に開口）	須恵器（表採）	開墾済（柿畑）	石室に使用したと思われる石材が、傍らに積まれている。
2	河原石使用石室	" (" )	" (" )	石材を畦畔に使用している。
3	"	" (" )	" (" )	
4	地輪郭を見ると円形に土地が区切られており、円墳であったと思われる。	" (" )	" (みかん畑)	カヌス塚と呼ばれていた。
5	柿の施肥のため掘削した時、河原石を組んだ石室があったという。		竹藪、柿畑	
6	河原石が多く出土、古墳の可能性が高い		開墾済（白菜畑）	
7	開墾時に河原石が出土		" (柿畑)	
8	河原石使用石室	須恵器 (多量表採)	" (" )	石材を畦畔に再使用する。(第4図)
9	開墾時に河原石が出土。古墳の可能性あり。	" (近隣で表採)	" (みかん畑)	

## 第3章 調査の結果

### (1) 調査区の概要（第7図 別刷付図）

本調査区は、縁塚丘陵の最も北部に位置している倒L字形の丘陵で、西側面及び北側面は非常に急傾斜であり、南方向及び西東部はやや緩やかに傾斜している。

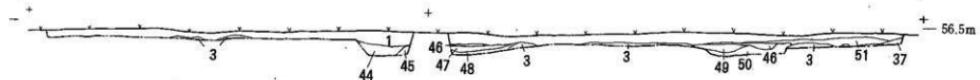
昭和の初め、雑木林を開墾し、果樹園として耕作されてきたところであって、尾根上の全域は、ほぼ標高56m程度に削平されている。

調査区において、本調査を実施した結果、丘陵の基部、屈曲部及び先端から合計3基の古墳が検出された。先述の分布調査、試掘調査の結果を踏まえ、順に11号墳、5号墳、10号墳とした。

本来5号墳は、聞き取り調査の時点では11号墳がそれにあたると推定されていたが、試掘の結果、当該地点では遺構を検出できず、現5号墳の地点で検出したため、後者をあてた（第2章参照）。その後、従来の推定地を精査したところ、主体部遺構を確認したが、墳名を変更せず、順に11号墳とした。

なお、本調査区において3基の古墳の他、土壙群、土器棺墓及びその他のいろいろな遺構を確認するに至った。

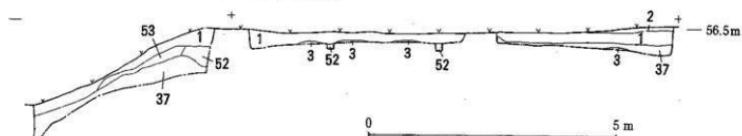
N-7, S-1 グリッド北壁



S-3 グリッド北壁



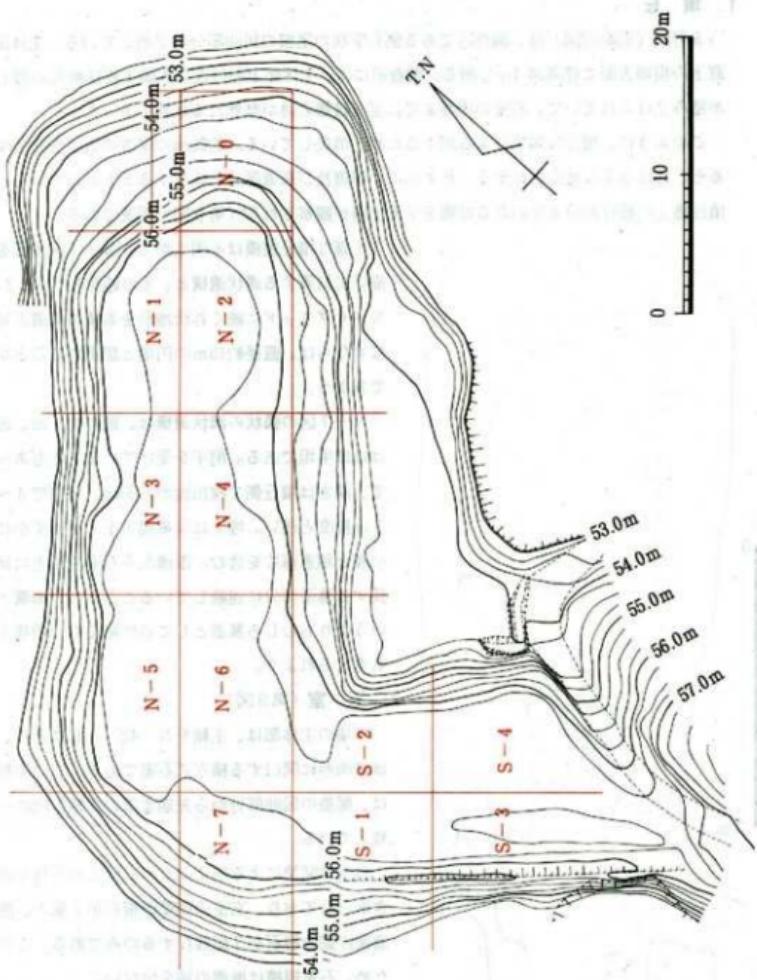
S-2 グリッド東壁



第6図 調査区土層図(2)

1 表 土 (淡灰褐色土)	28 淡灰青褐色土
1' 表土の擾乱 (試掘の埋め戻し)	29 淡灰黃褐色土
2 腐殖土	30 黄褐色土 (29のブロック混じり)
3 地 山 (無泥じり硬質黄褐色土)	31 堆肥質
4 黄褐色粘質土	32 暗灰褐色土
5 灰灰褐色土	33 暗灰褐色土
6 暗褐色土	34 暗灰褐色土
7 硫灰黃褐色土	35 暗灰褐色土
8 "	36 暗灰褐色土
(地山風化の著しいもの)	37 黄褐色土
9 灰灰褐色土	38 暗灰褐色土
10 淡灰黃褐色土	(粒子が細かい)
11 暗灰褐色砂質土	39 黄褐色土
12 暗灰褐色土	(地山ブロック混じり)
13 暗灰黃褐色土	40 "
14 "	41 暗灰褐色土 (灰色が強い)
(やや粘質)	42 淡灰黃褐色土
15 黄褐色土	43 暗灰褐色土
16 暗灰褐色土	44 暗灰褐色土
17 暗灰黃褐色土	45 黄褐色土
18 淡灰褐色土	46 暗灰褐色土
19 灰灰褐色土	47 暗灰黃褐色土
" (硬質)	48 暗灰褐色土
21 黄黃褐色土 (粒子が粗い)	(地山ブロック混じり)
22 黄褐色土	49 暗灰茶褐色土
" (硬質)	50 暗黄褐色土 (硬質)
24 表土に黄褐色土粒を含む	51 淡灰褐色土
25 凪ちた樹木腐	52 淡灰褐色土
26 灰灰褐色土	53 暗灰褐色土
27 暗灰黃褐色土	

第7図 緑塚古墳群第1調査区調査前地形測量図（グリッド配置図）



## (2) 5号墳

### 1. 墳丘

5号墳（別刷付図）は、調査区である倒L字状の尾根の屈曲部分に立地している。主体部直上の現地表面で標高56.4mを測る。調査前には、主体部上面付近に人頭大及び拳大の礫石が積み上げられていて、石室の床面までに至る破壊の跡が歴然たる状態であった。

このように、墳丘は開墾による削平のため、消失している。約20cmの厚さの表土を除去すると、ほぼ水平な地山面に至る。わずかに、羨道及び墓道部分に該当する5トレにおいて、墳丘盛土の残存部分と思われる堆積を示す土層が観察される（第5図）程度である。

正確な墳丘規模は不明ながら、N-7区で弧を描いて周する溝状遺構と、その延長上のS-2、N-6グリッドに続く谷状地形を本墳の周溝と見なすならば、直径約15mの円墳と想定することができよう。

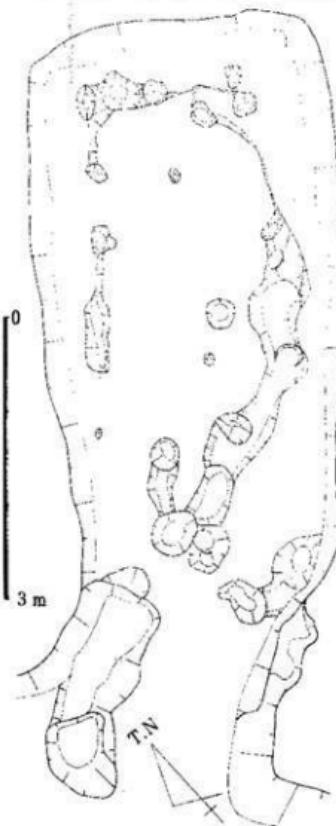
N-7区の弧状の溝状遺構は、幅が約1m、底はほぼ平坦である。削平を受けていることもあって、深さは墳丘側で検出面から20cm、下方で4~5cm程度と浅い。埋土は灰黄褐色土で、わずかに小礫と須恵器片を含む。羨道から石室主軸上に延長する墓道部分に連続していることから、周溝というよりもむしろ墓道としての性格をもつ遺構とも考えられよう。

### 2. 石室（第9図）

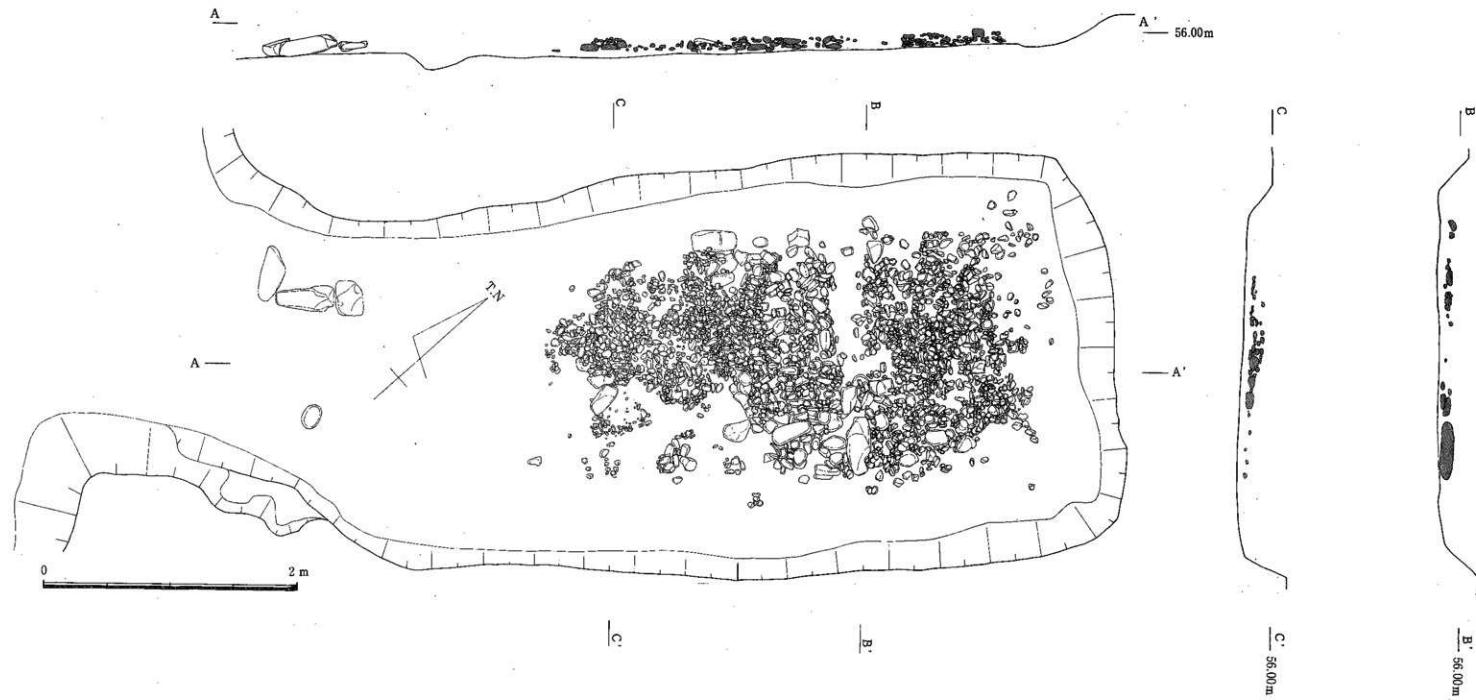
本墳の主体部は、主軸をN-42°Eにとり、ほぼ南北に開口する横穴式石室である。この主軸は、尾根の屈曲部分から先端までの主軸方向に一致している。

石室は開墾による削平のため、殆どの石材が抜き取られており、玄室の側壁の根石が1個と、羨道部片側の根石が3個残存するのみである。このため、石室規模は推測の域を出ない。

検出した掘り形（第8図）は、墓道の屈曲点から最奥部までの全長が8.6m、最大幅3.3mを測る。敷石の範囲や浅く残る根石の掘り形などをもとに



第8図 5号墳掘り形平面図



第9図 緑塚5号墳石室実測図

推測すると、玄室は長さ3.6m、最大幅1.8m、羨道は残存する根石のうち1個だけ方向の異なる石を羨道の入口と考え、長さ2.3m、幅0.7~0.8m程度の規模を想定することができる。

敷石の小礫は、先述のように調査前から地表面に一部が石室用石材と共に集められ、表土及び埋土中にもかなりの量が混在していた。床面で検出した敷石も、2次的な移動や遊離が著しい。本来、下面に拳大の敷石、上面に細かい小礫が敷かれていたものと思われる。

また、玄室中央東寄りに主軸に直交する方向の石材が見られる。その延長上で、敷石が一直線上に途切れている部分があり、これらは玄室内の仕切り石が存在した痕跡と考えられる。

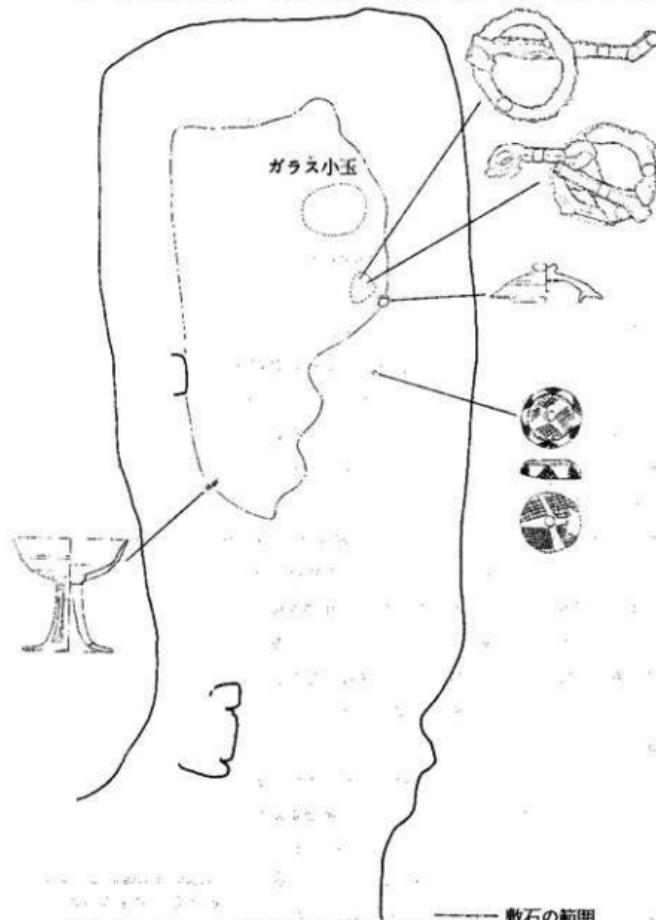
なお、排水施設は検出されなかつた。

### 3. 遺物の出土状況

(第10図)

遺物は、石室が破壊されていることもあつて、量的には少ない。

玄室前半分、西側袖石が存在したと思われる付近の床面からは、



第10図 主要遺物出土状況図

須恵器の高坏が1点出土した。それ以外はすべて玄室東半分の側壁寄りの床面に集中している。奥寄りの小礫間にガラス小玉が、その南に鉄鐵・馬具が鏽により一塊となって出土した。これらはほぼ原位置を保っているものと思われる。鉄製品のそばからは須恵器の蓋が床面からやや遊離した状態で、またその前方の敷石が残されていない部分で、紡錘車が掘り形の底面に密着した状態で出土した。蓋と紡錘車は、石室が破壊された時点での2次的に移動したものであろう。

#### 4. 出土遺物

##### (1) 須恵器（第11図）

須恵器は2点出土したのみである。

1は有蓋壺の蓋である。直径10cm、口径6.1cm、器高3.4cmを測る。つまみは中心ではなく、やや片寄っており、中央が凹む。貼付けによるかえりは端部を丸くおさめる。青灰色を呈し、堅緻である。

2は無蓋長脚高坏である。口径10.3cm、器高10cm、底径7.9cmを測る。坏部と脚部には各1条の凹線を施す。透かしは3方である。脚端部は丸く終わる。淡灰色を呈し、焼成は普通である。

##### (2) 装身具（第12図）

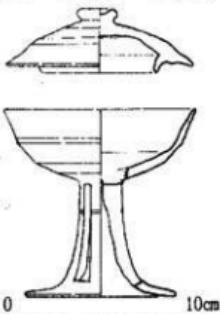
ガラス玉が囲化できたもので62点、他に碎けたものが数個体出土した。1～54は0.55mm～1.1mmの直径をもち、濃紺色を呈する。55～62は直径2.5～4.7mmのものである。55は青緑色、56・57は濃紺色、58はコバルトブルー、59～62は黄緑色を呈する。

63は銅製の空玉であろうか。径1mmの孔が2箇所にあり、一方の下方に不整形の窓がある。鈴の可能性も考えられる。

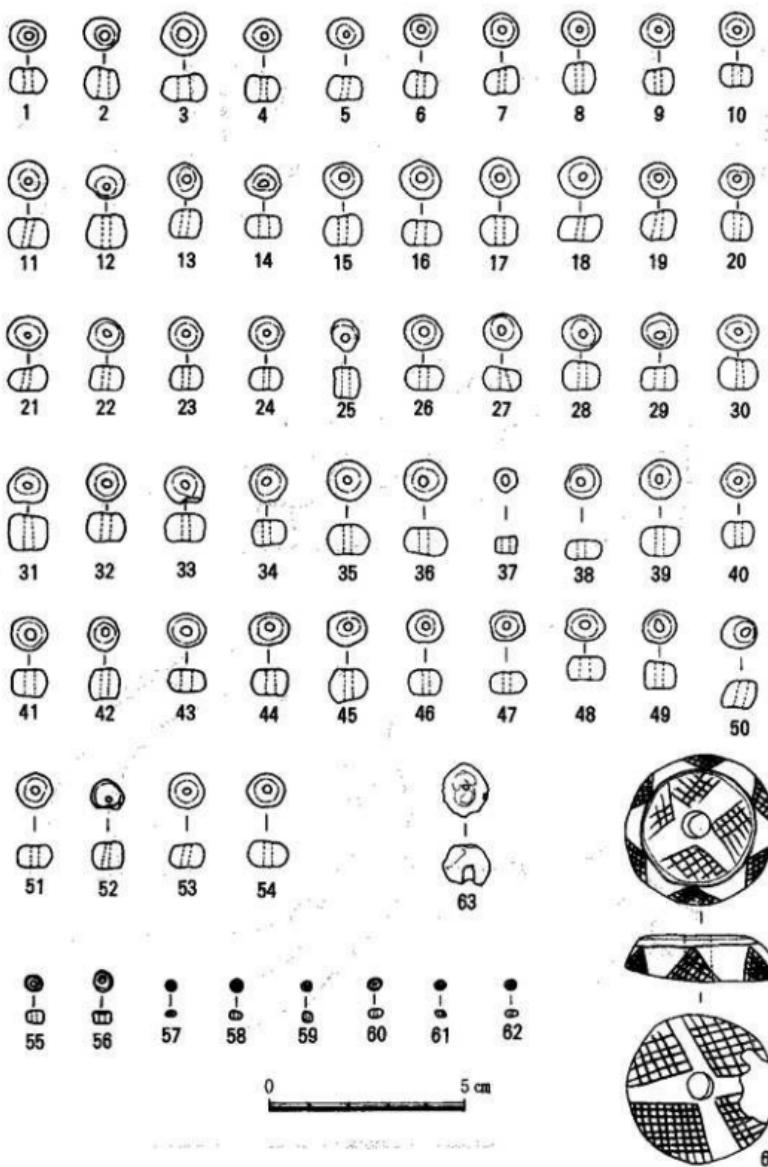
64は、蛇紋岩製紡錘車である。上面径2.8cm、底面径3.8cm、高さ1.2cm、重さ29.7gを測り、暗緑色を呈する。中心の穿孔は直径0.75cm、円筒形である。上面、側面、底面にはそれぞれ粗雑な格子目状の鋸歯文が廻るほか、上面と側面間の稜線より0.1cmほど下に1条の圓線が廻る。他に側面には水平方向の細かい擦痕が廻り、上面及び特に底面には不定方向への夥しい擦痕が認められる。

##### (3) 馬具（第13図）

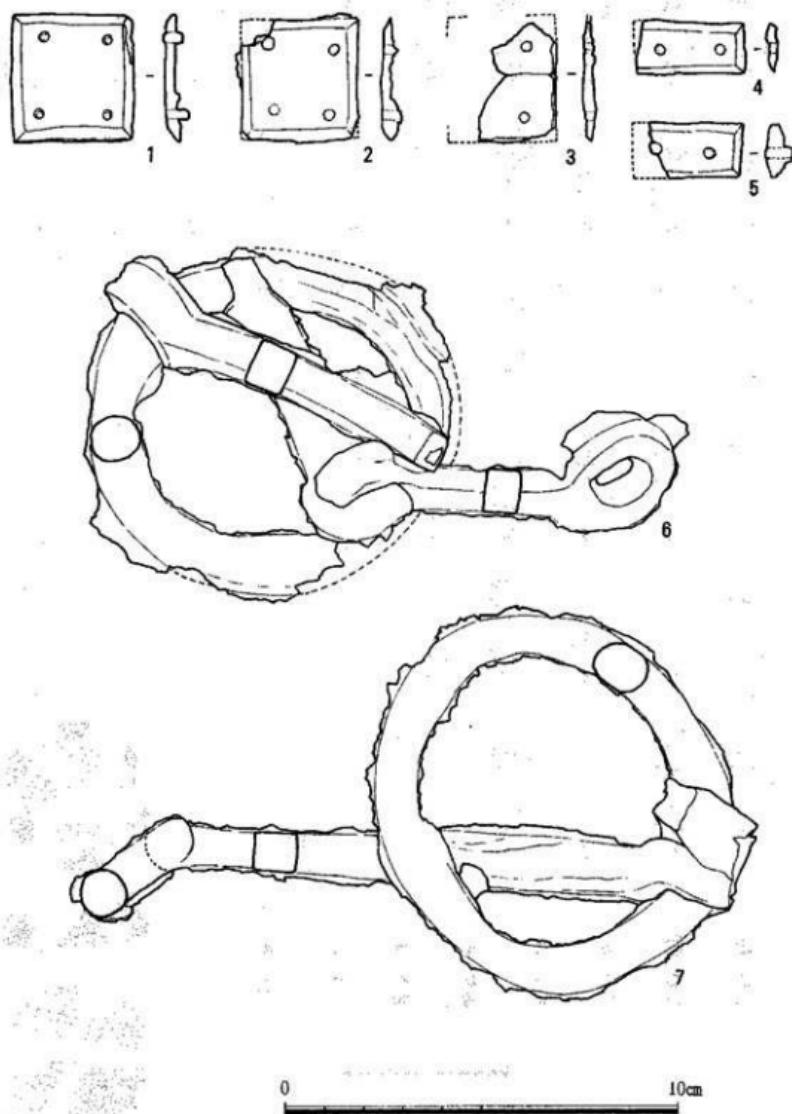
方形飾金具と轡が出土している。方形飾金具は正方形のものが3点、長方形のものが2点である。いずれも鉄地金銅張である。1は3.1×3.2cmを測る。2は2.9×3.1cmを測る。3は隅を欠損している。3は破片であるがやはり1辺3cm前後であろう。4は2.8×1.2、1.4cmを測る。5は $\frac{1}{6}$ ほど欠損して



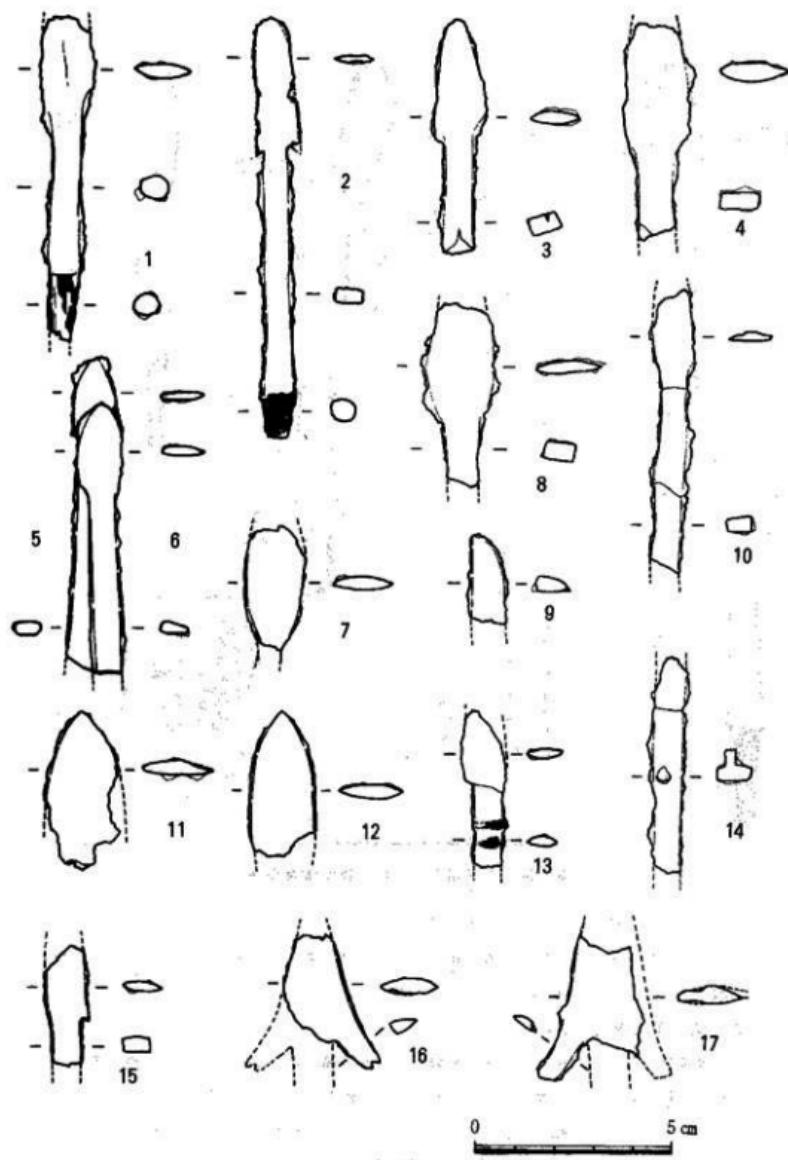
第11図 5号墳石室内  
出土遺物実測図(1)



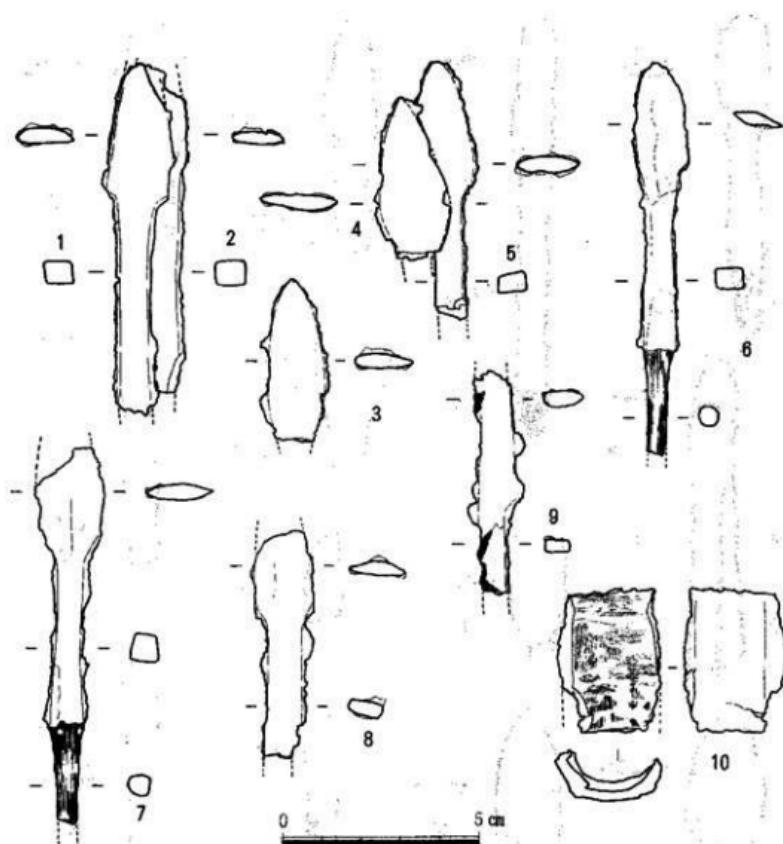
第12図 5号填石室内出土遺物実測図(2)



第13図 5号横石室内出土遺物実測図(3)



第14図 5号墳石室内出土遺物実測図(4)



第15図 5号墳石室内出土遺物実測図(5)

いるが4とほぼ同じ大きさであろう。

6・7はいずれも引手と鏡板・銜の連結部分である。6は部が完存し、引手は $\frac{1}{2}$ ほど欠損している。7は引手が完形で、17cmを測る。

#### (4) 武具(第14、15図)

鐵鎌及び刀子が出土している。鐵鎌は殆どが一塊となって出土したが、鍔が著しく、完形で分離することは困難であったため、図化可能なもののみ紹介した。

1～8・10・13は鑿箭式、9は片齒箭式、11・12は柳葉形式、16・17は脇抉をもつ長三角形式と思われる。14は笠被部に目釘状の突起が認められる。また、2の茎部には桜と思われる樹皮が残存している。

### (3) 10号墳

#### 1. 墳丘・周溝（第16図）

10号墳は、調査区である尾根の先端に立地する円墳である。この尾根の先端は、斜面の中にテラス状の平坦部があり、墳裾を形成している。5号墳・11号墳とほぼ同じ標高約56.3mに削平されて、マウンドの痕跡がなく、調査当初、ある程度古墳の存在を予想してはいたものの、充分には把握できていなかった。

表土を除去する段階において、尾根の先端を切断する周溝を検出したことから、古墳の存在を確認することができた。

墳丘は盛土部分が全く残されておらず、地山を削り出した基底部のみ、尾根上で0.6m、先端のテラスからは1.9m残存している。

現存部分から10号墳の直径を復原すると、約15m程度と推定できる。

周溝は、尾根主軸上の南西部分で幅4.4m、深さ0.6m、西側で直角に近いコーナーを形成し、幅1.2~1.6m、深さ0.2~0.3mと、規模を小さくして東北東に延び、斜面部で立ち消える。

周溝の埋土は灰黄褐色土及びその上層の暗褐色土からなる。表土との間には黄褐色粘質土が堆積していたが、これは地山と同質であり、開墾時にそれまで残存していた周溝を埋め立てて平坦に整地した痕跡と考えられる（図版3の2）。尾根上の周溝内の暗褐色土上面には人頭大のものを含む塊石が10数個、散乱した状態で検出された。これらは、開墾時に破壊された石室の用材であった可能性が高い。

また、周溝の南西部分の暗褐色土層から、おびただしい量の破碎須恵器片が集中する土器溜りが検出された。

なお、第6節でも述べるが、墳丘で4基以上の隅丸長方形の土塼墓及びその可能性のある落ち込みを検出している。

#### 2. 石室（第17図）

本墳の主体部は、玄室・羨道・墓道で構成され、主軸をN+7°-Wにとり、ほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室である。

開墾による破壊は、3基のうち最も少なく、玄室では掘り形の底面から、側壁で0.8m、羨道部では0.5mの高さに積石が遺存していた。

玄室の平面プランは、全長3.05m、奥壁幅1.9m、玄門内側で1.5m、最大幅は2mを測る。玄門から両袖に開き、やや胴張り気味に弧を描きながら、奥壁から0.5m手前で最大幅となる羽子板状を呈する。

玄室の側壁は、東西両壁とも奥寄りで5段、中央部で4段残存している。やや持ち送り気味に積み上げられ、間隙を拳大の長円錐で充填している。石材は殆どが砂岩系の転石である

が、東壁前寄りのコーナー近くの1石のみ、方形切り石が2段目に配されている。

床面は、下層に最大30～50cm程度から拡大までの偏平な塊石を敷き詰め（第18図）、その上面に径3～5cmの小円礫を敷き詰めている。

下層の敷石は、玄室前半分が比較的大形で、前1/3附近が最もレベルが高い、上層の小円礫は前1/3がやや小さめで、玄門のすぐ内側では、下層敷石の間隙にも詰まっている。なお、この小円礫は、玄門部袖石から閉塞石に至る部分で最もレベルが高く、奥壁部との比高差は10cmほどにもなる。

墓壇掘り形は、地山を削り込み、全長5.9m、最大幅3.0m、深さ0.6mの長方形を呈し、墓道に向かって緩やかな傾斜をもつ。

### 3. 墓道・墓道

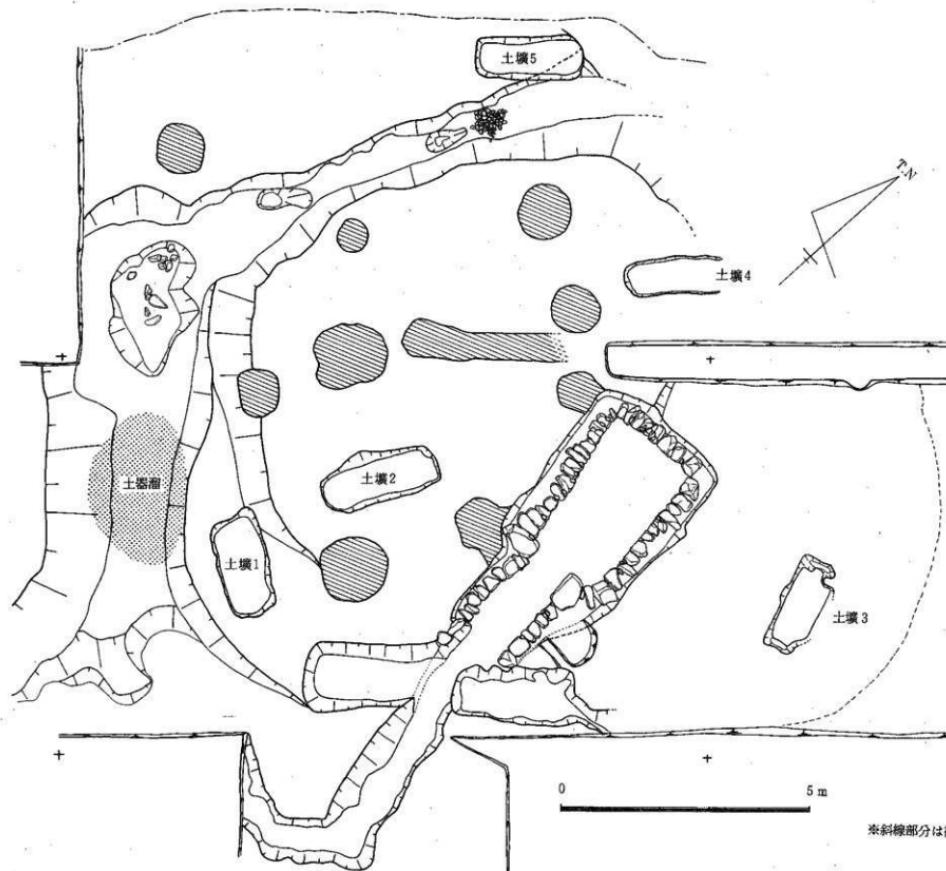
墓道部は、長さ2.2m、幅0.85～0.95mを測り、その南はJ字状に、周溝に至る墓道が延びている。壁面石材は、西壁で4段、東壁で2段が残存する。なお、西壁は、墓道に移る附近で、ややせり出した地山の上に積石が1～2石、配されている。また、東壁では残存する先端から2石目が、わずかに自然面を残す方形の切り石である。

床面は平坦な地山面で、墓道に向かってゆるく傾斜している。その墓道に移行する手前のほぼ中心主軸上に、扁平な塊石が1個、地山直上に置かれていた。埋土等の状況から開墾時の転落ではなく、築造もしくは埋葬時に意図的に置かれたものと思われる。

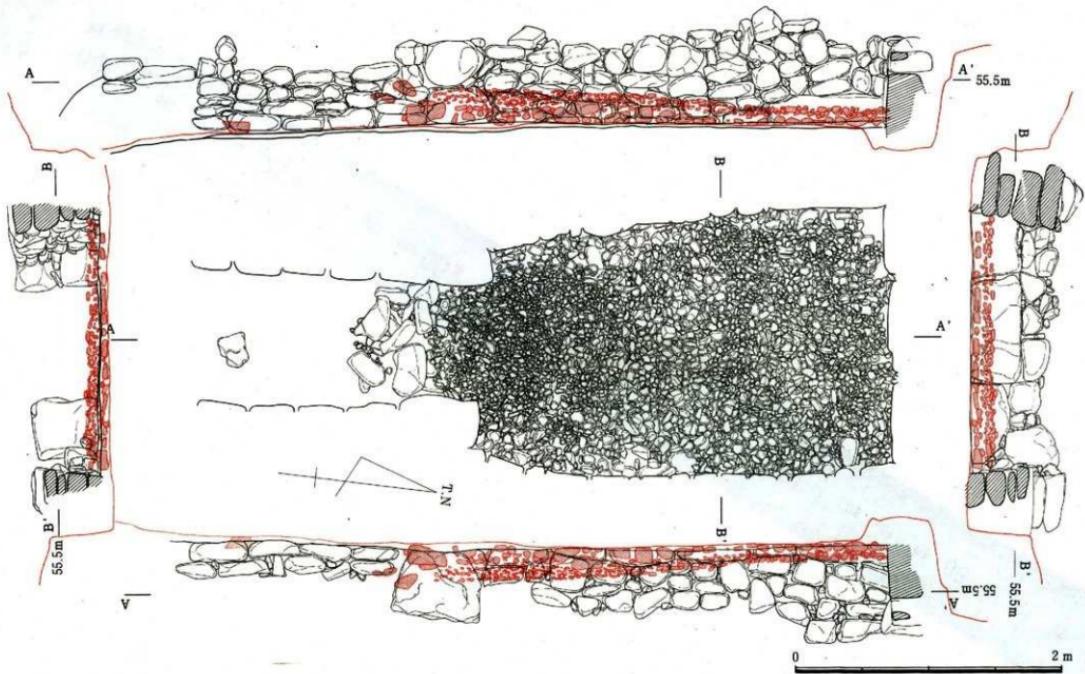
ちなみに、玄室とも排水施設は検出されなかった。

墓道は、墓道部から南へ、斜面部にかけて延び、西向きにJ字状に曲がった後、尾根を切断する周溝中に立ち消える。

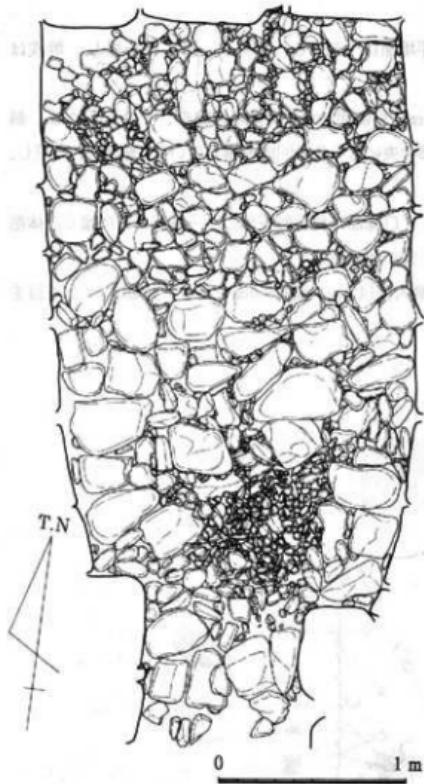
検出全長は、約3.5mで、最大幅0.6mを測り、その断面はU字形を呈する。その検出面において、須恵器壺（身・蓋）が墓道底からは20cmほど浮いた状態で出土した。墓道からはずれた緩斜面では、墓道築造以前に埋没した2基の土壤状の落ち込みを切っている。この土壤状の遺構は、尾根の主軸にほぼ平行しており、いずれも墳丘の地山検出過程で検出された。2段に重なるこの2基のその重なりの上を墓道が横切っているため、各々の本来の規模は不明である。



第16図 10号墳墳丘内遺構配置図



第17図 總塚10号墳石室実測図



第18図 10号墳石室床面（下層）実測図



第19図 玄室側壁切石使用部分

#### 4. 遺物の出土状況（第20図）

遺物は、玄室・羨道部及び墓道・周溝から出土した。

玄室内は、開墾による破壊を受け、石室を構成する石材が、床面及び埋土中に崩落していたが、遺物は、ほぼすべて床面及び敷石間から多量に出土しており、破壊に伴って盗掘を受けていた形跡は認められなかった。

遺物は主として玄室の東半分に多く、西半分からは側壁際を除くと殆ど出土していない。

玄室内からは須恵器の壊蓋が1点も出土せず、墓道中からはほぼ一括して底面から浮いた状態で出土した。

周溝までは、尾根上で少量、やや南側で集中した土器溜として、須恵器が出土した。

#### 5. 玄室の出土遺物（第21～28図）

##### (1) 須恵器

第21図1～4は壊蓋である。1は口径11.8cm、器高3.4cmを測る。頂部平坦面はヘラ切り、他は横ナデで

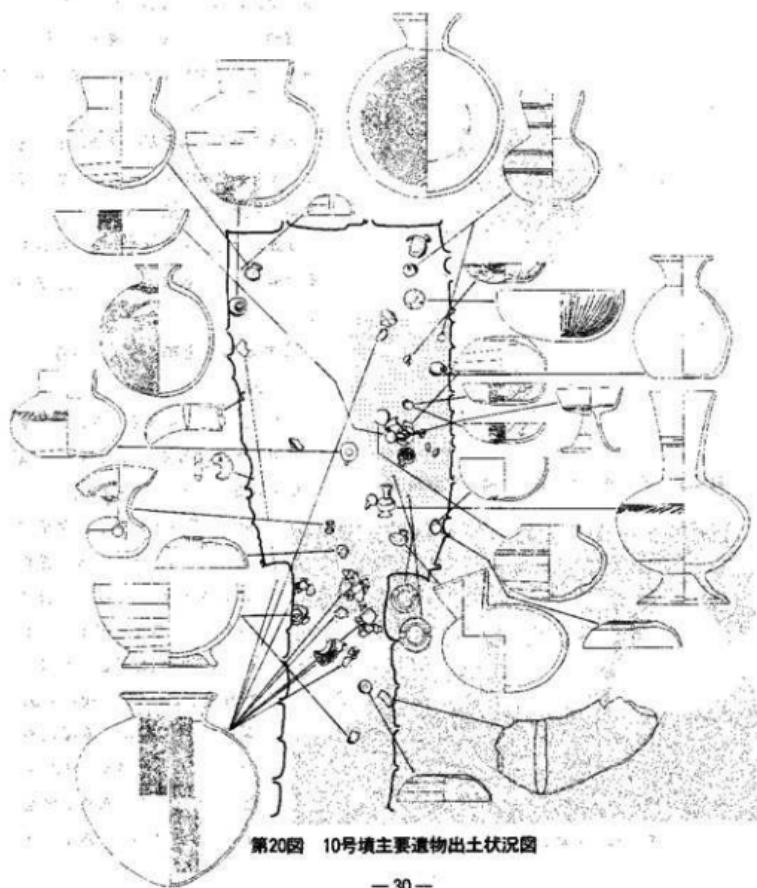
ある。青灰色を呈し、焼成は良い。2は口径11.6cm、器高4.3cmを測る。頂部平坦面はヘラ切り、他はナデ仕上げである。青灰色を呈し、非常に堅緻である。3は口径12.4cm、器高3.3cmを測る。頂部はやや凹んでいる。頂部ヘラ切り、他はナデによる。暗青灰色を呈し、焼成は良好である。4

は口径11.6cm、器高3.9cmを測る。頭部平坦面はヘラ切り、他ナデ。青灰色を呈し、焼成は良杆である。

5は高壺である。口径8.5cm、器高8.1cm。壺部屈曲点に1条の凹線を、その下面には、斜行するクシ書き列点文を施す。また脚部中央にも1条の凹線を施している。暗青灰色を呈し、焼成は極めて良好である。

6は趣である。焼成時の垂みが著しく、口縁部は長円形を呈し、一方が下方に傾く。体部に1条、頸部に2条、口縁部の下方に1条の凹線を施す。

7は短頸壺である。口径7.2cm、体部最大径14.1cm、器高9.6cmを測る。体部にはカキ目を



第20圖 10号墳主要遺物出土狀況圖

施し、その上に2条の浅い凹線が巡る。口縁部は薄くなり、約1cm垂直に立ち上がる。青灰色を呈し、焼成は良好である。

8は直口壺である。口径7cm、体部最大径14.4cm、器高10.8cmを測る。底部はヘラ切りによる平底であるが、やや内側に凹んでいる。体部には2条の凹線が巡り、間に斜行するクシ描き列点文が施されている。頸部はほぼ垂直に2.7cmほど立ち上がる。

9は広口壺である。口径7.6cm、体部最大径13cm、器高15.3cmを測る。底部は平底で、ヘラケズリによる。体部上半分はカキ目を施す。頸部は漏斗状に外反し、口縁端部は丸く肥厚する。

10は脚付広口壺である。脚部は欠失している。口径7.7cm、体部最大径12cmを測る。体部、頸部とそれぞれ2箇所に2条ずつの凹線が施されている。頸部はゆるく外反し、口縁部は直立して薄くなる。脚部は、その断面の切込み底から3方向にスカシが認められる。

11は広口壺である。口径10cm、体部13.5cm、器高13.9cmを測る。頸部は直線的に開いて立ち上がる。底部はヘラケズリによる丸底である。

12は平瓶である。口径6.9cm、体部径15.8cmを測る。頸部内面に自然軸がかかる。底部は丸底で、内面に同心円タタキ、外面には平行タタキを施した上をナデて仕上げている。口縁部はやや開き気味に、1cmほど垂直に立ち上がる。

第22図1は脚付長颈壺である。口径8.5cm、体部最大径16.9cm、器高26.7cmを測る。灰白色を呈し、焼成はやや不良である。頸部はほぼ中央に2条、体部上方に1条の凹線、体部凹線の下に斜行クシ描き列点文が施されている。

2は脚付壺である。凹線部分から上半分の大部を欠失する。

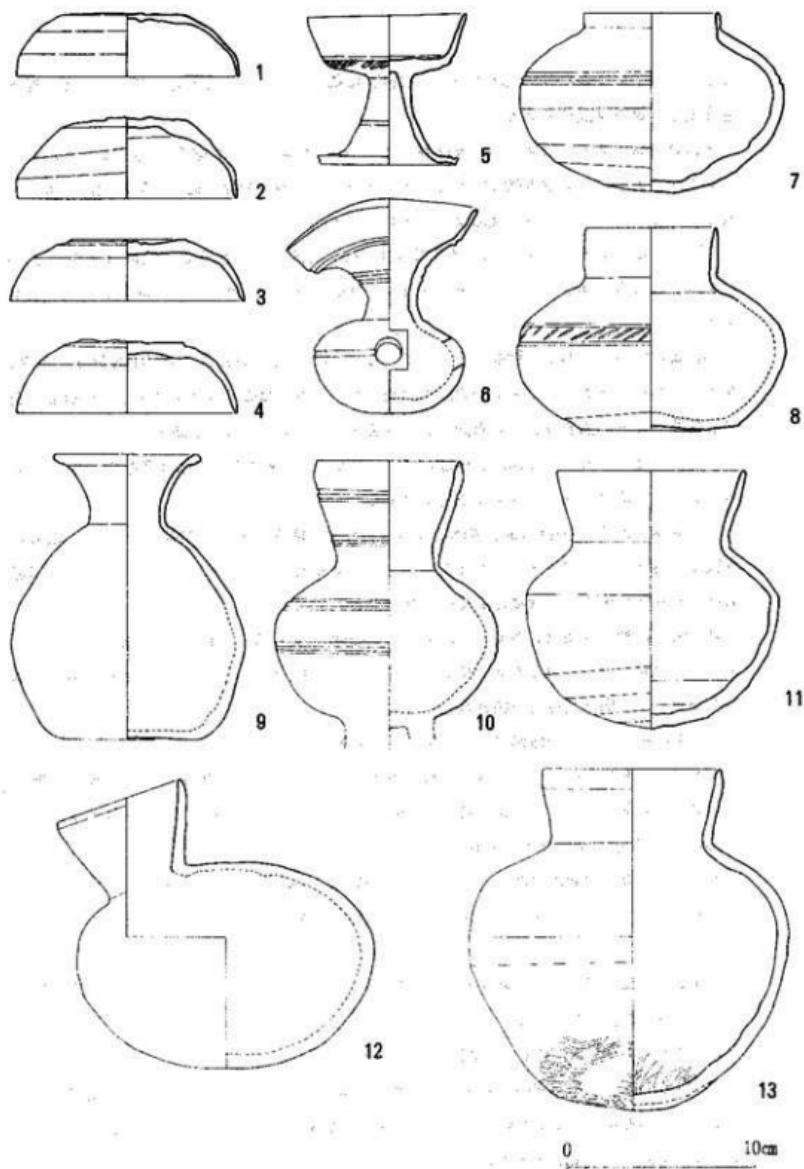
3・4はいずれも把手をもたない提瓶である。3は口径5.9cm、器高16.5cmを測る。青灰色を呈し、体部は前面にカキ目を施す。口縁部は著しく外反し、端部は薄くすぼまる。4は口径8.7cm、器高23cmを測る。体部前面にカキ目を施す。

第23図1は壺の口縁部である。口径15.8cmを測る。一条の凹線から下を欠失する。段の上下ともカキ目の上に斜行するクシ描き列点文を施す。濃灰色を呈し、焼成は極めて良好である。

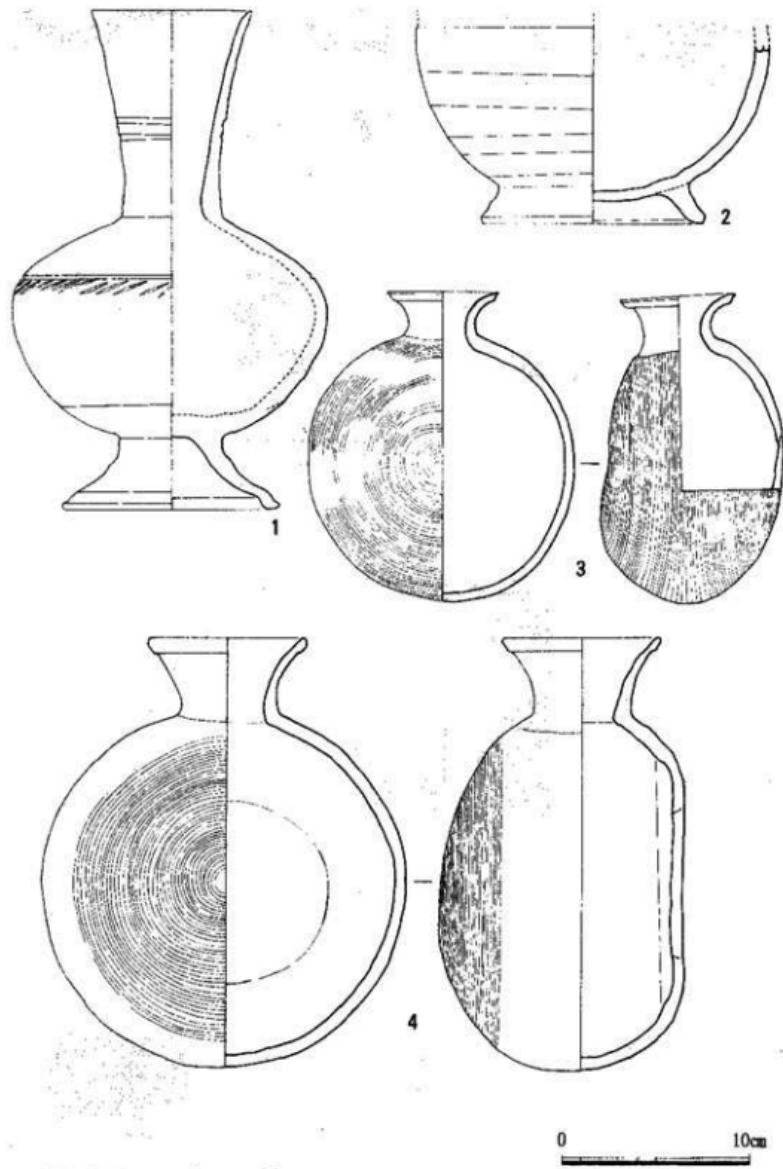
2は高杯の脚と思われる。破片であり、粗いカキ目の上にスカシを切り込むが、その数は不明である。紫灰色を呈する。

1・2とも小礫と大型敷石との間から出された。

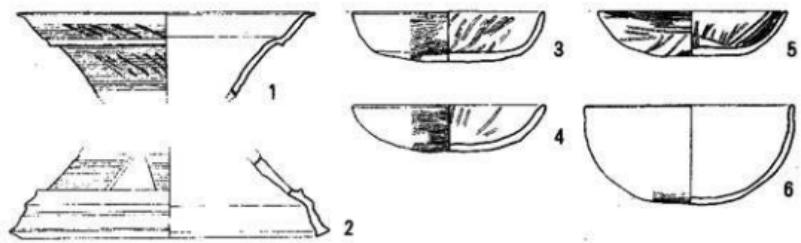
9は壺である。1部玄室内から出土した他は閉塞石上面から出土している。口径22.8cm、器高48.4cmを測る。口縁部は薄くなりつつ外反し、肥厚して上方に拡張し、端部はほぼ平坦である。体部外面は格子タタキ、内面は同心円タタキを施す。



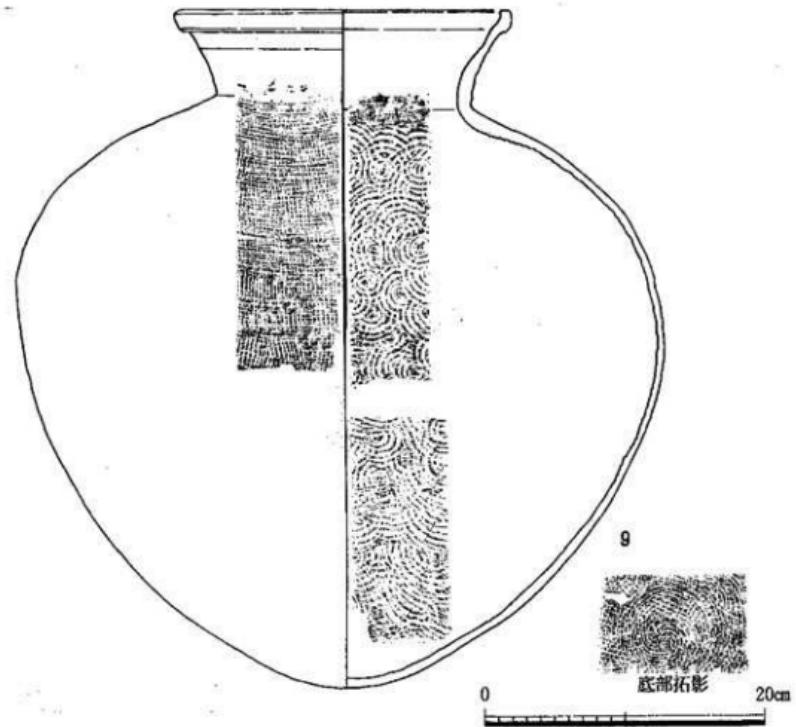
第21図 10号墳石室内出土遺物実測図(1)



第22图 10号墓石室内出土遗物实测图(2)



0 10cm



第23図 10号墳石室内出土遺物実測図(3)

## (2) 土師器 (第23図3~8)

3と4の壺は上下に重なって出土した。3は口径10.1cm、器高2.7cmを測る。外面ヘラミガキ、底部ヘラケズリの上ヘラミガキ、内面は暗文を施す。暗橙色を呈し、焼成は不良である。4は口径10.2cm、器高2.5cmを測る。外面ヘラミガキ、内面に暗文を施す。淡褐色を呈し、焼成は不良である。

5は口径10.1cm、器高2.4cmを測る。外面ヘラミガキ、内面に暗文を施す。淡褐色を呈し、焼成は不良である。

6~8は壺である。6は口径11.1cm、器高5.3cmを測る。底部にヘラミガキを施す。軟質でもろく、特に内面は剥落が著しく、調整は不明である。暗黄橙色を呈する。7は口径16cm、器高6.5cmを測る。外面ナデ、内面には暗文を施す。淡赤褐色を呈する。8は口径16.9cm、器高5.5cmを測る。外面はヘラミガキを施し、内面は磨滅により不明であるが、一部に暗文が認められる。淡赤褐色を呈し、外面底部から一側面に黒斑がある。

他に1点、壺もしくは壺が出土しているが細片が多く、復原図化はできなかった。

## (3) 装身具 (第24図)

1~3は耳環である。うち、1・2は対をなす。1は銅地に施された金箔が一部剥離しかけているが残存している。2は既に剥落してしまっている。1は長径31mm、短径28mm、環の断面は径6.5mm、重さ19.3gを測る。2は長径26mm、短径24mm、断面径6mm、重さ12.5gを測る。3は細身の耳環で銅地のみ残る。断面径2.7mmを測る。

4は翡翠製と思われる勾玉である。濁白色で、部分的に緑色が帯状にかかる。全長17.2mm、重さ1.8gである。一方向からの穿孔をもつ。

5は切子玉である。半透明の淡茶色を呈する。材質は不明である。全長10.5mm、最大幅11mm、重さ1.3gを測る。中程を脇らませて、両截断面ともに六角形の稜をつけている。穿孔は1方向からであるが、内部で斜方向へ別の穿孔があり、外表にまで亀裂が生じている。

6は琥珀玉である。暗茶褐色を呈する。表面は風化により、やや白っぽい、全長13.5mm、椭円形の最大幅10mm、重さ0.7gを測る。片側からの穿孔である。

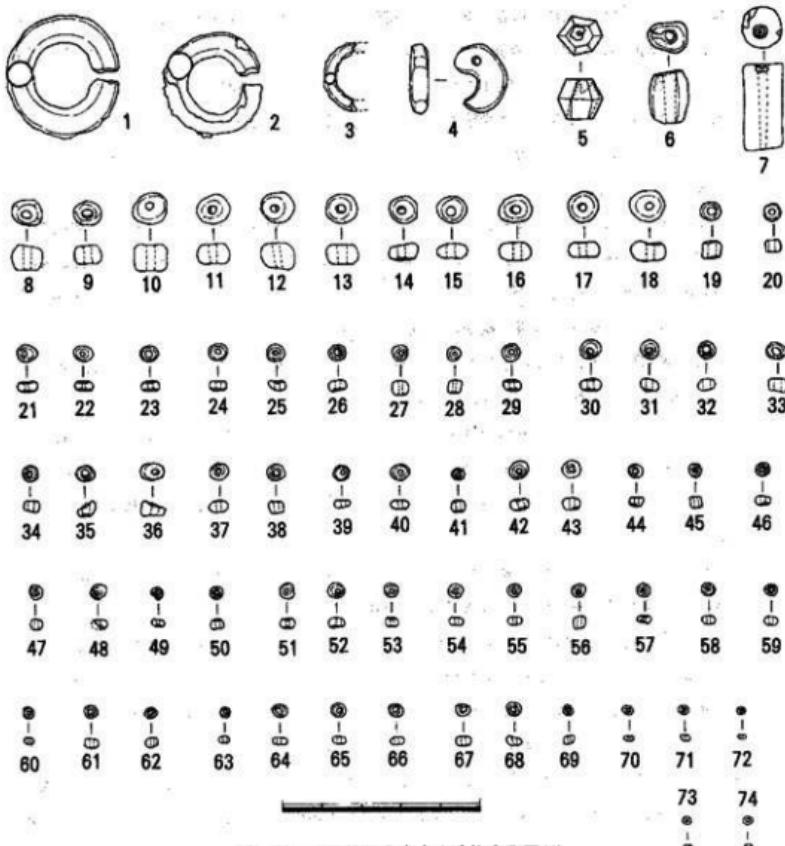
7は管玉である。暗緑色を呈し、材質は不明であるが、ガラス製の可能性もある。全長21.5mm、最大径10mm、重さ4.3gを測る。1方向からの穿孔である。口径の大きい側では、首飾りとして並べて綴られていたと思われる緑色のガラス丸玉が1個、挿まれている。

8~74はガラス丸玉である。8~18は白玉と呼ばれる大きめのもの、19~43のやや小さめのもの、44~71の小玉、72~74の極小玉と大きさは多様である。明青緑~明青色17個、明緑色7個、黄色4個、赤茶色1個のほかは大半が濃紺色である。ほかに図化できない破片が数個体分出土している。

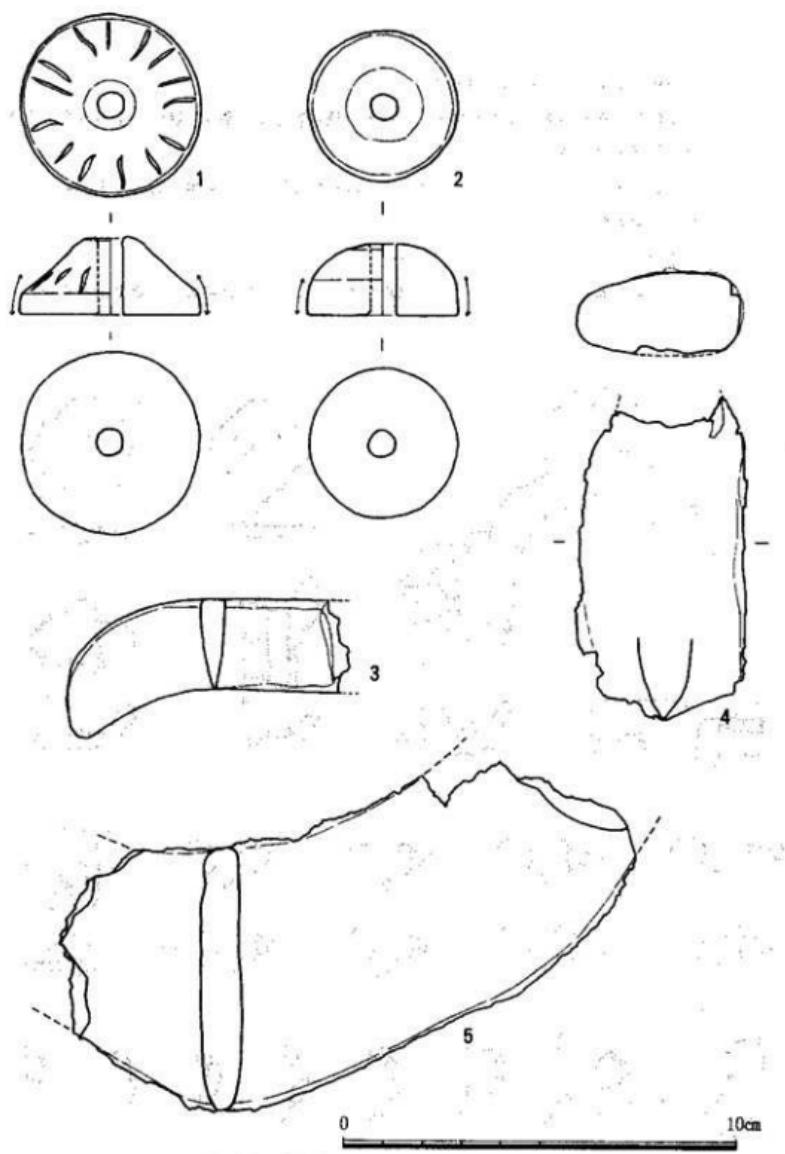
(4) 農工具 (第25図)

第25図1・2は紡錘車である。5号墳出土のものと同様、いずれも蛇紋岩製である。黄褐色を帯びた暗緑色を呈する。1は直径46mm、高さ19.5mm、重さ50.2gを測る。円柱状の穿孔は径6.5mmを測る。笠状に立ち上がる斜面の下半分には放射状の文様が刻まれている。側面下部は回転による擦痕で白くなり、斜側面の下半分の文様部分にまで擦痕は及んでいる。

2は半球状を呈する。径38mm、高さ18mm、重さ43g、中央の円筒形の穿孔の径は6.5mmを測る。これも1同様、側面の下から10mmの高さまでは回転による擦痕がめぐる。



第24図 10号墳石室内出土遺物実測図(4)



第25図 10号墳石室内出土遺物実測図(5)

3は鉄鎌である。全長7.4cmを測る。

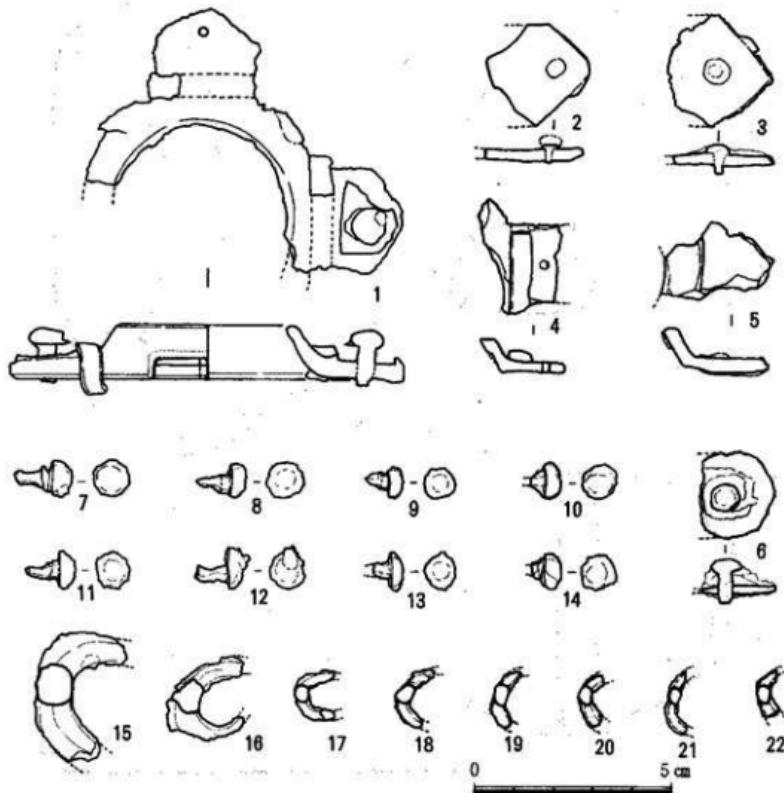
4は鉄斧と思われる。基部を欠失している。鋲が著しく、亀裂・膨張により本来の大きさは不明である。袋式であろうか。

5は鎌先と思われる。刃先部のみ残存し、両耳はない。これも鋲による膨張が著しい。

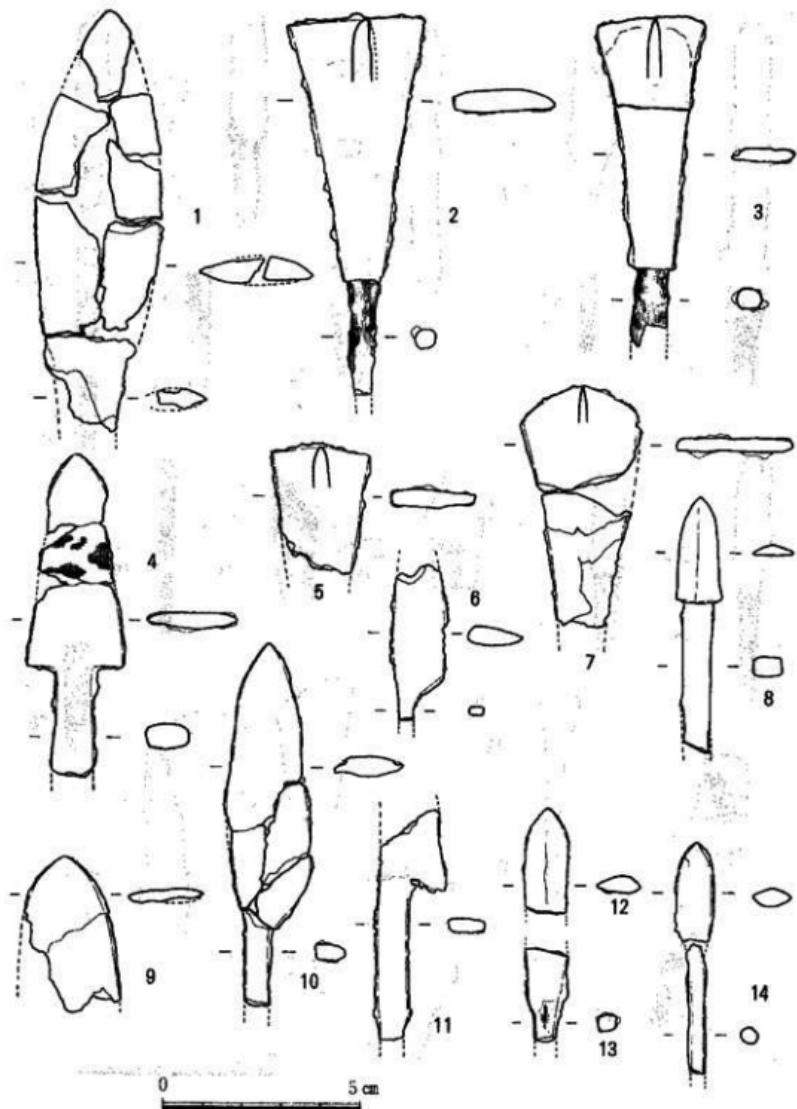
(5) 馬具（第26図）

以下は図化可能なもののすべてである。

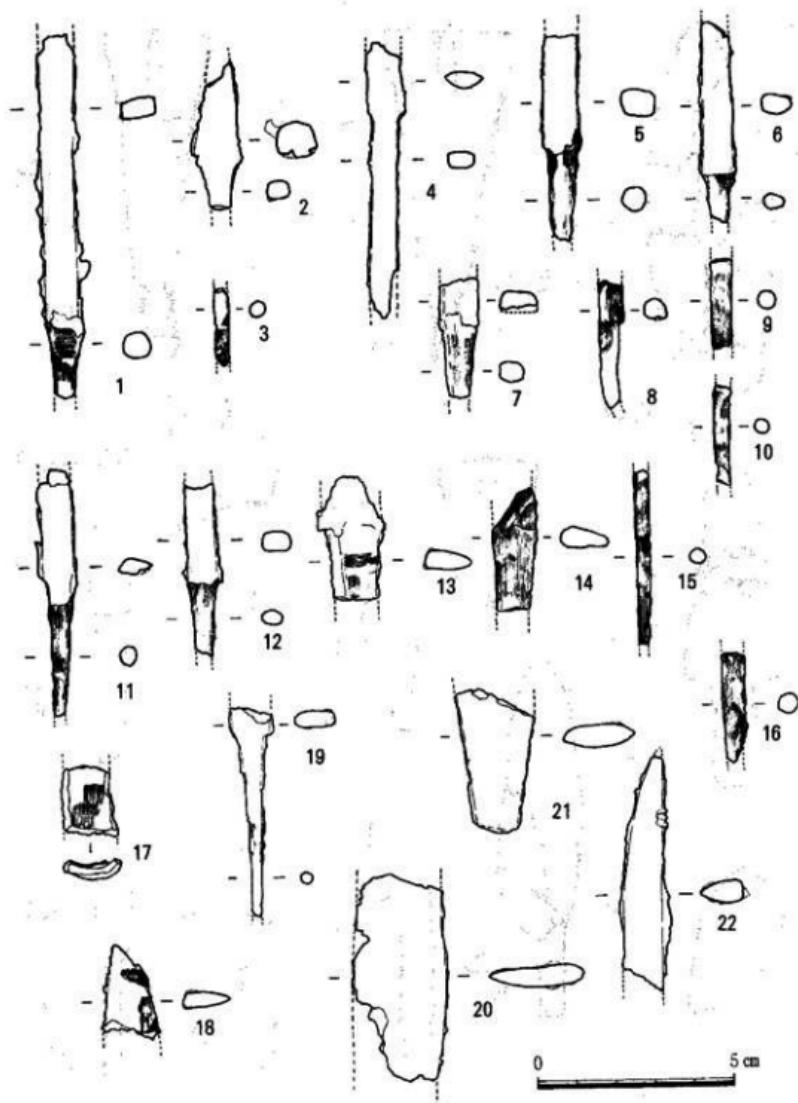
1～5は辻金具と思われる。6～14は紐であろう。15～22は鞍具の一部であろうか。



第26図 10号墳石室内出土遺物実測図(6)



第27图 10号填石室内出土遗物实测图(7)



第28圖 10號填石室內出土遺物實測圖(8)

#### (6) 武具 (第27・28図)

鉄鎌・刀子が出土している。鉄鎌は完存しているものではなく、頭部が折れてしまっているものばかりで、個体総数は不明である。

第27図 1・8～10・12～14は整箭式である。うち、8は片丸造り、他は両丸造りによる。2・3・5・7は斧箭式、6・11は片刃箭式である。4は両丸造長三角形式である。鎌身の鋒に布目痕を残す。

第28図 1～16・19は鎌頭部である。いずれも木質部を残す。

18・20・22は刀子片と思われる。20は刀子の基部か。

17は不明鉄製品である。内側に桜樹皮が付着したままである。

#### 6. 墓道・周溝の出土遺物 (第29～32図)

第29図は墓道から出土した須恵器である。

1は無蓋高環である。口径12cm、器高13.6cmを測る。環部中ほどに1条の凹線、下方に凹線状の屈曲点をもつ。脚部は2条の凹線を隔てて、上下にそれぞれ2方向のスカシをもつ。端部は外方に反り返る。

2は脚付壺の脚か。2条の凹線を隔てて下方に3方向、上方は破片のため数は不明であるが、いずれも三角形のスカシをもつ。下方スカシの下にも1条の凹線が巡り、端部は内傾して肥厚する。

3～10は环蓋である。3～5は小片で、図は反転復元されたものである。いずれも口縁内部に稜をもつ。9は頂部が凹み、口縁にも歪みがある。10は、口縁内部に稜をもつ。10が淡灰色を呈するほかは、いずれも青灰色を呈する。

11～18は环身である。11・12は小片である。13は受け部の先端に凹線をもつ。14は受部の先端に凹線が巡る。14は底部へラ切り後の指痕痕が、内外面に明瞭に残る。白灰色を呈する。15は立ち上がりが著しく内傾している。全体に焼成がやや不良気味のものが多い。

第30～32図は周溝内の土器溜りから出土した土器である。

第30図 1～3は壺である。1は口径13.3cm。段の上に浅い凹線をもつ。段より上はクシ描き波状文、下方はタテ方向のヘラミガキ調整を施す。口縁内面に自然釉が見られる。

2は口径15.2cm。段の真上に浅い凹線をもつ。段の上下ともタテ方向のヘラミガキ痕を残す。

3は口径13.3cm、高さ16.8cmを測る。体部やや上方に凹線を施し、それにかかるように、ほぼ中央に穿孔している。底部内面に当て具痕が認められる。

4・5は脚付壺である。4は体部中央に斜行するクシ描き列点文を施す。脚のスカシは3方向である。5はやや高い脚をもつ。脚はカキ目を施し、3方向に長方形のスカシをもつ。

6は無蓋高環である。環部は下方に凹線と斜行放射状にクシ描き列点文を施す。脚部の下

方にも2条の凹線が巡る。

7も高壇の脚であろう。3方向のスカシが穿たれている。

8は环身である。受け部がU字状に立ち上がる。

9・10は短頸壺である。10は体部にカキ目を施し、口縁内部に稜をもつ。

11の壺は頸部を欠く。体部内外面に自然軸が見られる。内面または同心円タタキ、底部には指頭痕が残る。また、内外面ともに、タテ方向のクシ状工具痕が認められる。

12は有蓋壺の口縁部の細片である。13は脚付壺である。12と極めて似た胎土焼成であり、同じ一個体の可能性がある。

第31図1・2は提瓶である。1は口径8.6cm、器高19.6cmを測る。平坦な前面には、不定方向のカキ目が残る。肩部には萎小化した把手をもつ。2は口径7.1cm、器高21.2cmを測る。

1同様萎小化した把手をもつ。両面ともカキ目を施し、自然軸がかかる。

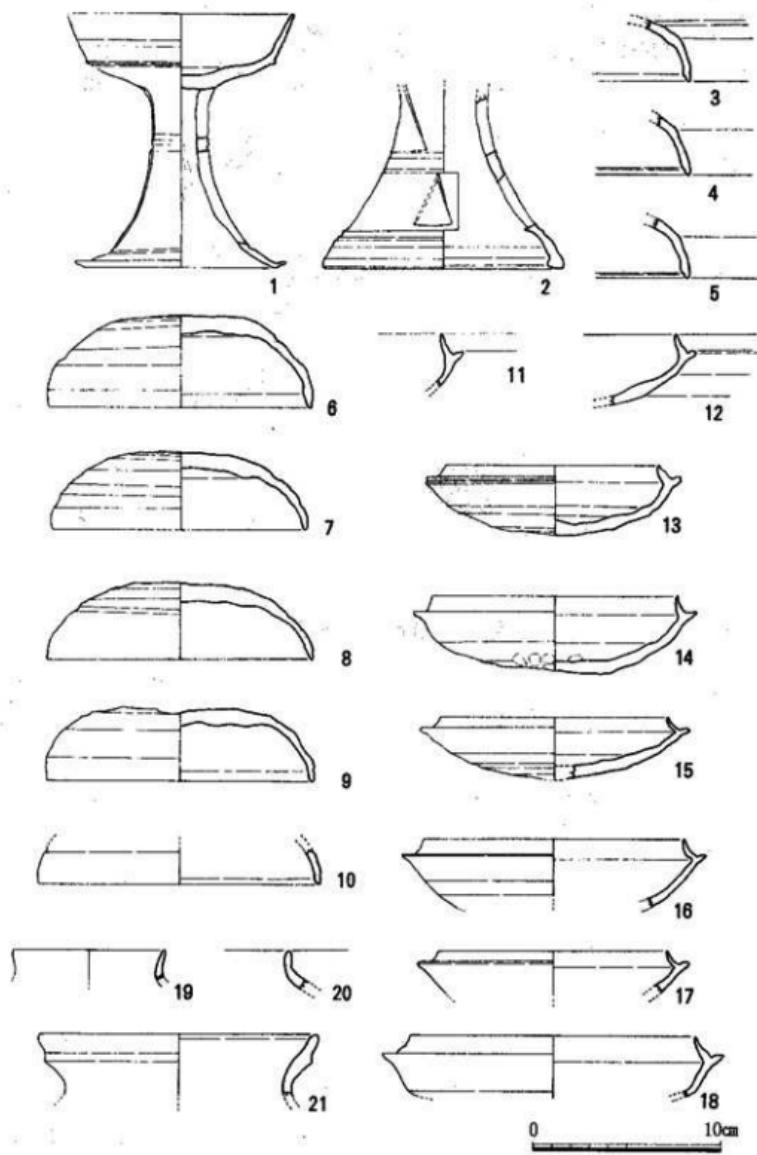
第32図はすべて須恵器の壺である。1は口縁部を欠く。図は反転復元によっており、残存部分の一部に歪な部分があるため、体部の正確な直徑は不明であるが、およそ28cm程度と思われる。外面にはタテ及びナメ方向の平行タタキを施し、最大径部分より上はカキ目を施す。内面には同心円タタキを施す。

2は頸部と肩部のみであり、体部の殆どは復元できない。口径は18cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は外に肥厚する。頸部外面に△状のヘラ記号もつ。体部タテ方向の平行タタキの上カキ目、内面に同心円タタキを施す。

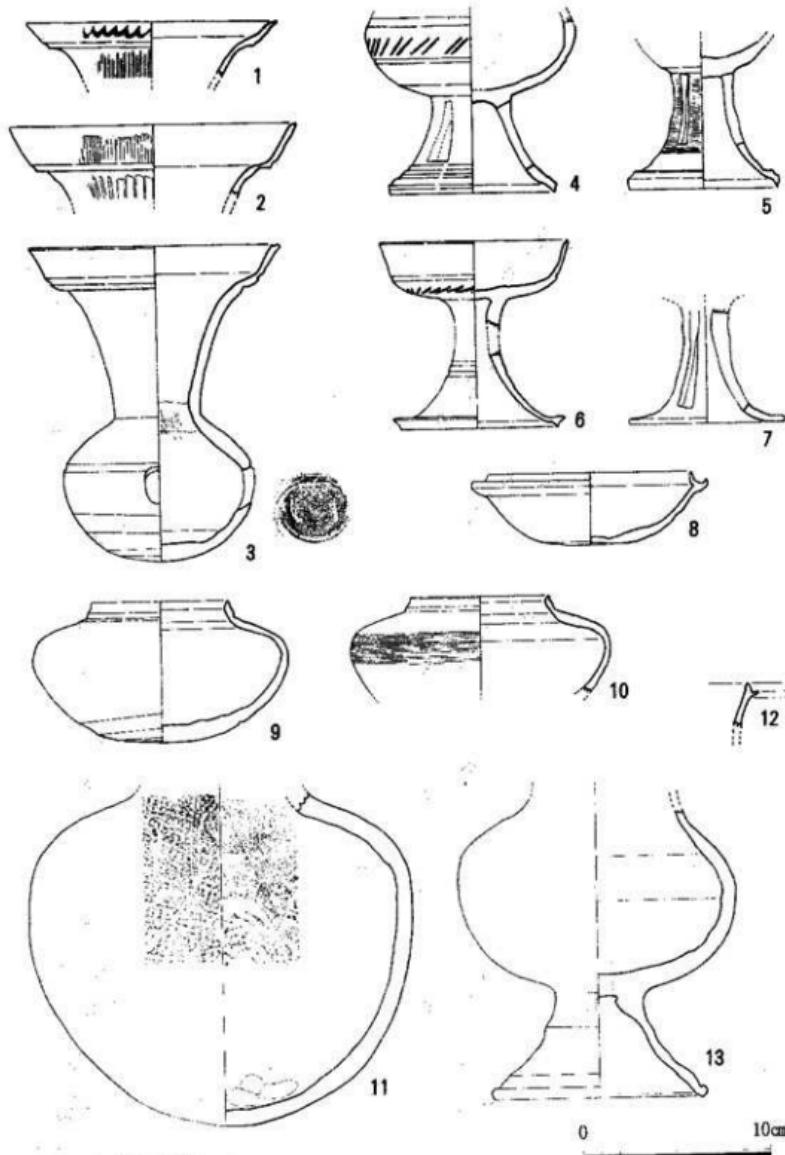
3は上半分のみ復元できた。口径23cmを測る。口縁部は外反し、端部はやや細く内傾し、上下に拡張する。

4は底部を含む体部の下方を欠く。口径24.3cm、体部最大径51cmを測る。口縁部は直線的に外反し、端部は外に肥厚する。肩部は3よりやや張り気味である。体部外面はタテ方向平行タタキ、内面は同心円タタキを施す。体部上半分の外面及び頸部内外面に自然軸がかかる。

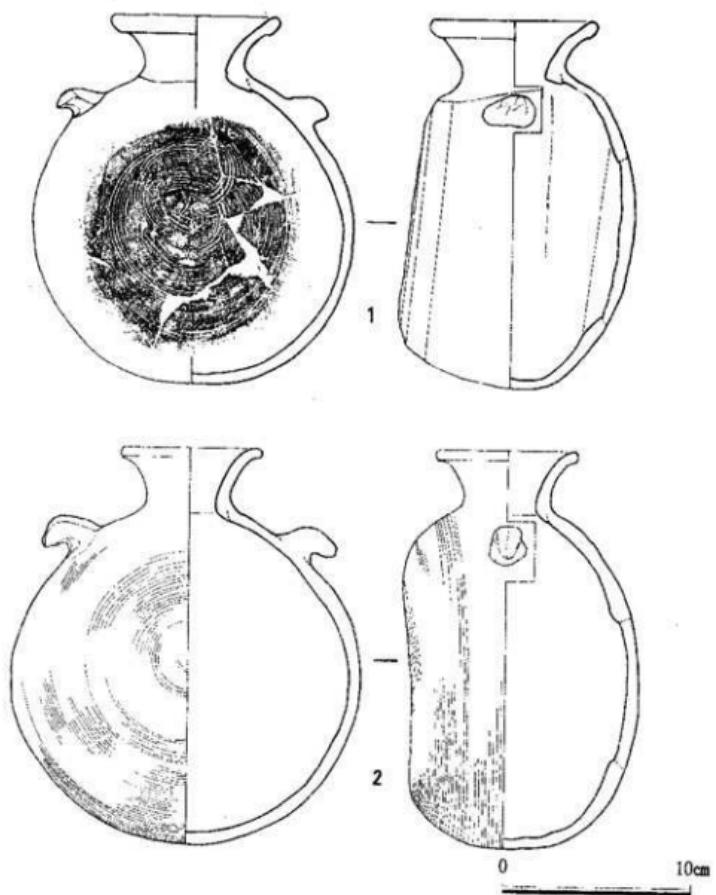
同溝の土器窯からは、上記の復元できていない部分のほか、数個体分の須恵器片が多く出土している。



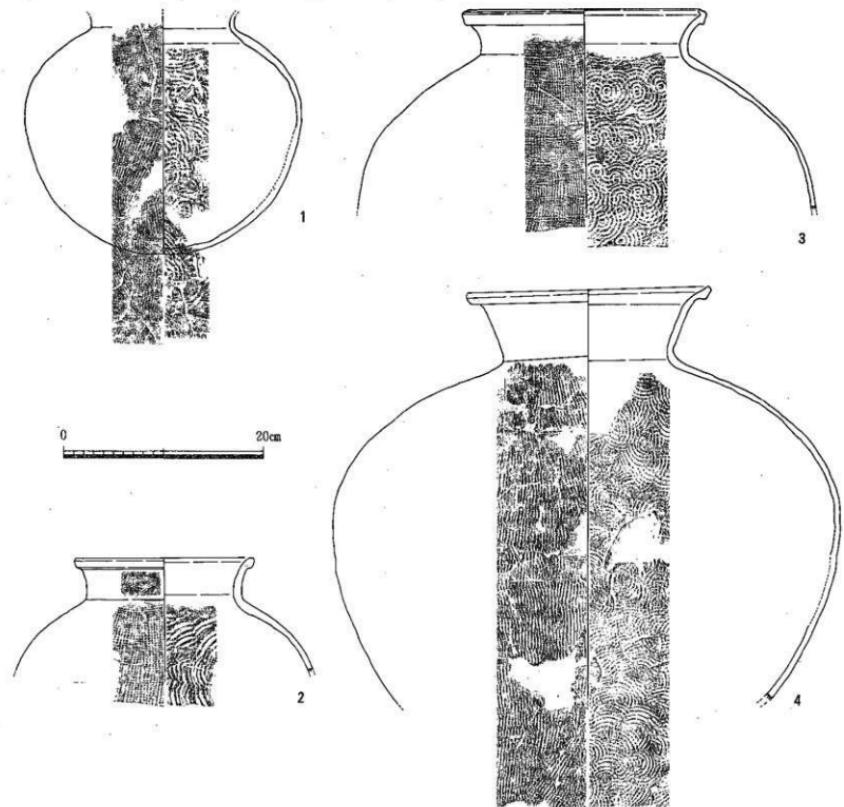
第29圖 10號墳墓道出土遺物實測圖



第30圖 10号墳周溝土器層出土遺物実測図(1)



第31図 10号墳周溝土器窯出土遺物実測図(2)



第32図 10号墳周溝土器溶出物実測図(3)

#### (4) 11号墳

##### 1. 墳丘(別刷付図)

11号墳は、尾根の基部寄りに立地する。やはり耕作により削平を受けており、先の5号墳、10号墳の表土面とおおむね同一レベルとなっている。耕作土下は20cmでほぼ水平な地山で、墳丘盛土は全く残されていない。ただ、主体部掘り形から5号墳寄りに約4mの距離で検出した2箇所の土壤状の落ち込みを、削平された11号墳の周溝の底と考えるならば、直径約11mの円墳を想定することができよう。

この土壤状の落ち込みは、S-1グリッドのものは長さ3.5m、幅1.7m、深さ0.15~0.2mで不整長円形を呈する。S-2グリッドのものは幅1.7m、深さ0.15~0.2m、長さは2mのところで発掘区外に延びているため不明である。両邊構が連続して11号墳主体部を囲むようにやや弧を描き、尾根を横断しているため、周溝の一部の可能性を見るのであるが、埋土から遺物は出土しておらず、また主体部の反対側では検出できなかったため、なお検討の余地を残す。

##### 2. 石室(第33図)

本墳の主体部は、主軸をN-42.5°-Eにとり、南西に開口する両袖式の横穴式石室である。開墾の際の破壊のため、石室を構成する石材は殆ど抜き取られていた。残存する石は、羨道部の両側で根石を含め3段程度、玄室は、奥に向かって左側では袖石に統いて根石のみ3個、右側ではほぼ中央部分の根石3個の上に2個載っているだけの残存状況である。他に、玄室床面の敷地上に数個、玄室を構成していたと思われる石材が散乱していた。石材はいずれも砂岩の転石である。

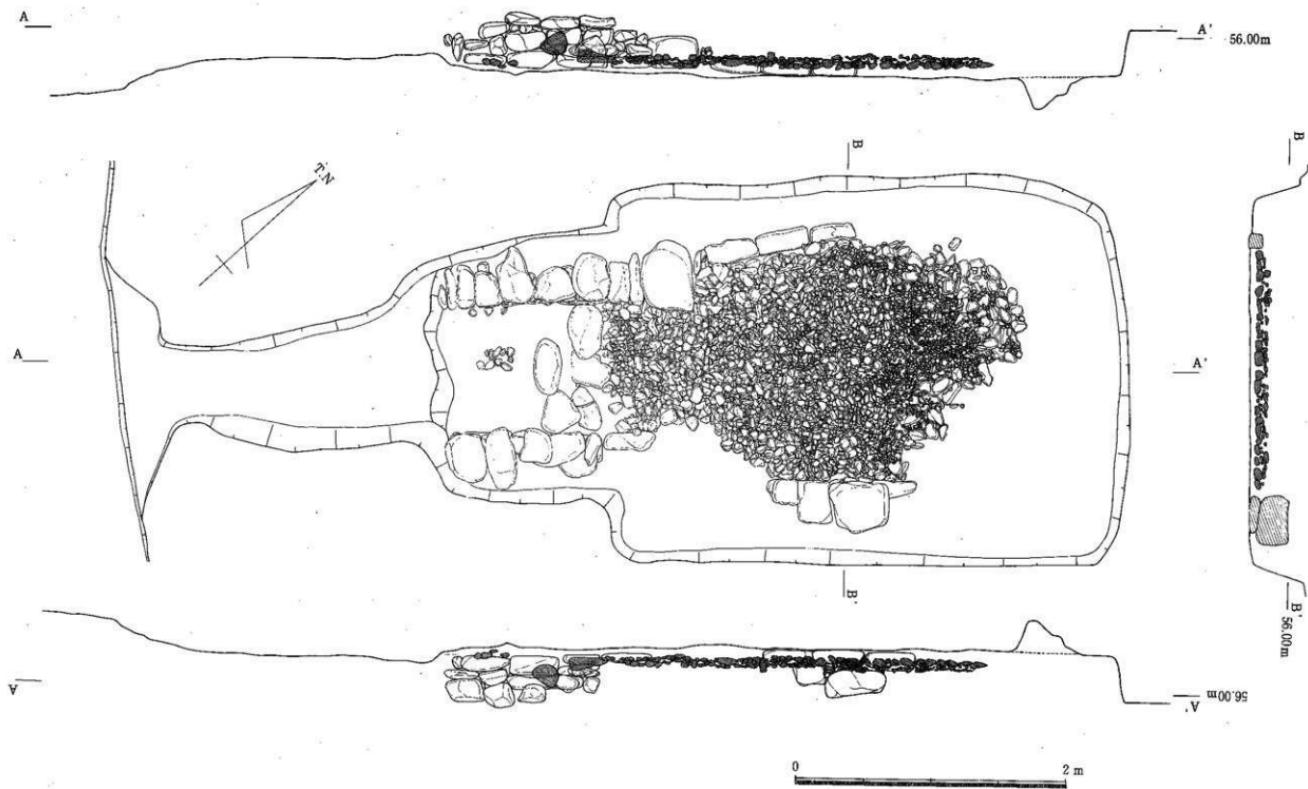
奥壁については、掘り形のみ検出された。おそらく10号墳同様、1~2個のやや大きめの石材が立てられていたものと考えられる。

奥壁掘り形の直前までは敷石が広がっていることから、玄室の全長は2.5mを測ることができる。また、左側根石の並びが湾曲していて、やや胴張りの傾向が認められる。玄室中央部の最大幅は、両側壁の根石間の距離から、1.8mを測る。

玄室床面は、開墾時の擾乱を受けたと思われる奥右隅の一部を除くほぼ前面に小礫を敷きつめている。のみならず、袖石よりさらに0.7mほど羨道部にまで広がりをもつ。なお玄門部の右側にも石が敷かれていらない部分が認められるが、現状から袖石が抜き取られた部分であろうと推察される。

敷石は、径10cm程度の拳大のやや扁平な塊石の上に、径5cm前後の礫を重ねているが、奥3分の1強の1m幅の範囲は、扁平な塊石の上に径1~3cmとかなり小さい円礫を敷きつめ、前方と区分している。

床面のレベルは、わずかに2~3cm程度奥の小礫部分が高い。しかし、開墾による擾乱を



第33图 11号墓石室实测图

受けているために、原位置を保っておらずに床面から離れている砾は除去しているため、このレベルの差が意味をもつものかどうか、疑問が残る。

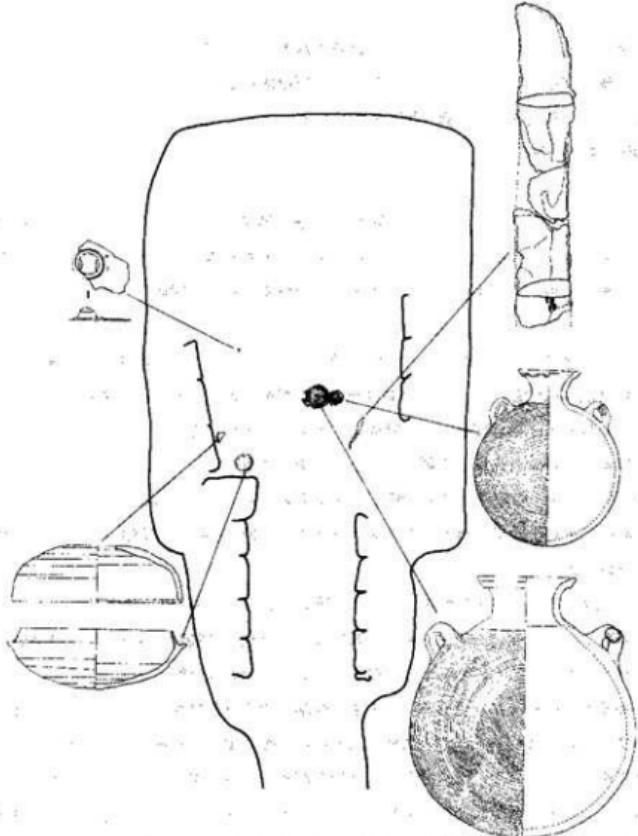
羨道部は、長さ1.9mと短く、幅は1mを測る。先述のとおり、羨道の奥0.7mの範囲は玄室と同じレベルで敷石が広がる。閉塞石は5石認められた。

なお、閉塞石と羨道入口のほぼ中央で、径5~10cmの、10個の小砾による集石が検出された。これは10号墳の羨道部で検出された扁平な石と対比して検討すべきものかもしれない。

羨道の入口は、急に0.1m高くなり、延長2.05mの墓道が続く。墓道の幅は、羨道部の掘り形の延長として検出したものであるから不正確ながら、約1.1m、斜面を下るにつれて狭

まり、幅0.6mを測る部分から急に広がり、近年の開墾によると思われる段落ちで消滅している。

玄室から羨道にかけて排水溝は検出されなかった。掘り形のレベルも水平を保ち、かつ墓道が10cmも高くならており、排水の行方に關して疑問の残る構造をしている。



第34図 11号墳主要遺物出土状況図

### 3. 遺物の出土状況（第34図）

5号墳同様、開墾による擾乱のため、遺物は極めて少ない。また、床面の敷石もかなり遊離している上に、側壁の石材も床面に転落しているなどの状況から、床面上から出土した遺物も原位置を保っているとは限らない。

遺物はすべて玄室の埋土、床面及び敷石の間から出土し、羨道及び墓道からは全く出土しなかった。

玄室のほぼ中央の床面上で須恵器の提瓶が大小各1点、並んで出土した。

左袖石付近では、1対の环蓋・身が、レベルは異なるものの、いずれも浮いた状態で出土した。

また、右袖石があったと思われる附近で、鉄鎌と鉄斧が並んで出土した。いずれも床面上ではあるが、鎌の刃部が上を向いている状況から、原位置を動いている可能性がある。

左側壁寄りでは、珠文鏡片が、敷石間から出土した。

### 4. 出土遺物（第35・36図）

須恵器は7点出土した。

第35図1は环蓋である。口径は15.1cm、器高は5.1cmを測る。天井部と体部は浅い沈線で区分されている。また口縁端部の内側にも沈線をもつ。天井部外面 $\frac{1}{3}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデを施す。青灰色で極めて堅緻である。2の环身とセット関係をなすものと思われる。

2の环身は、口径13.5cm、受部径16.1cm器高5.3cmを測る。立ち上がりは薄く、直線的に内傾する。底部外面 $\frac{1}{3}$ は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。青灰色を呈し、堅緻である。色調・焼成共に近似する1の环蓋とセット関係をなすものと思われる。

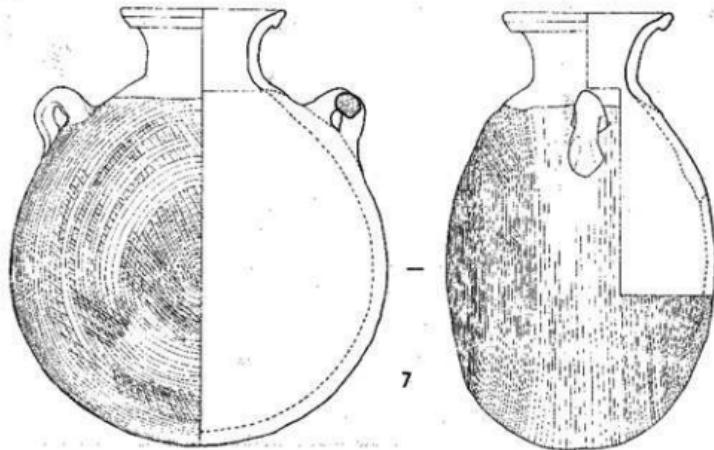
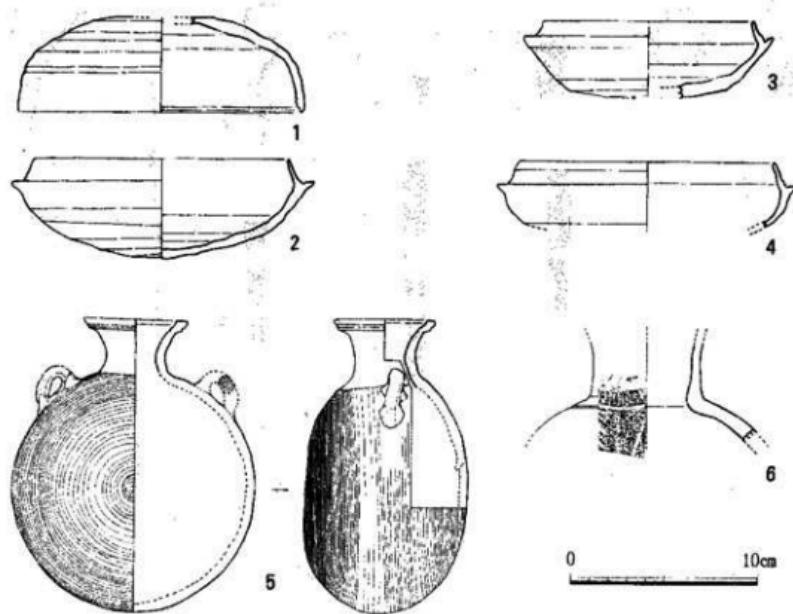
3と4の环身は、いずれも埋土上層から出土した破片である。

3は復原口径11.1cm、受部径13.3cm、器高4.1cmである。立ち上がりはふくらみをもってやや内傾し、端部は薄い。底部は外面 $\frac{1}{3}$ が回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整、やや灰色気味で、焼成は良好である。

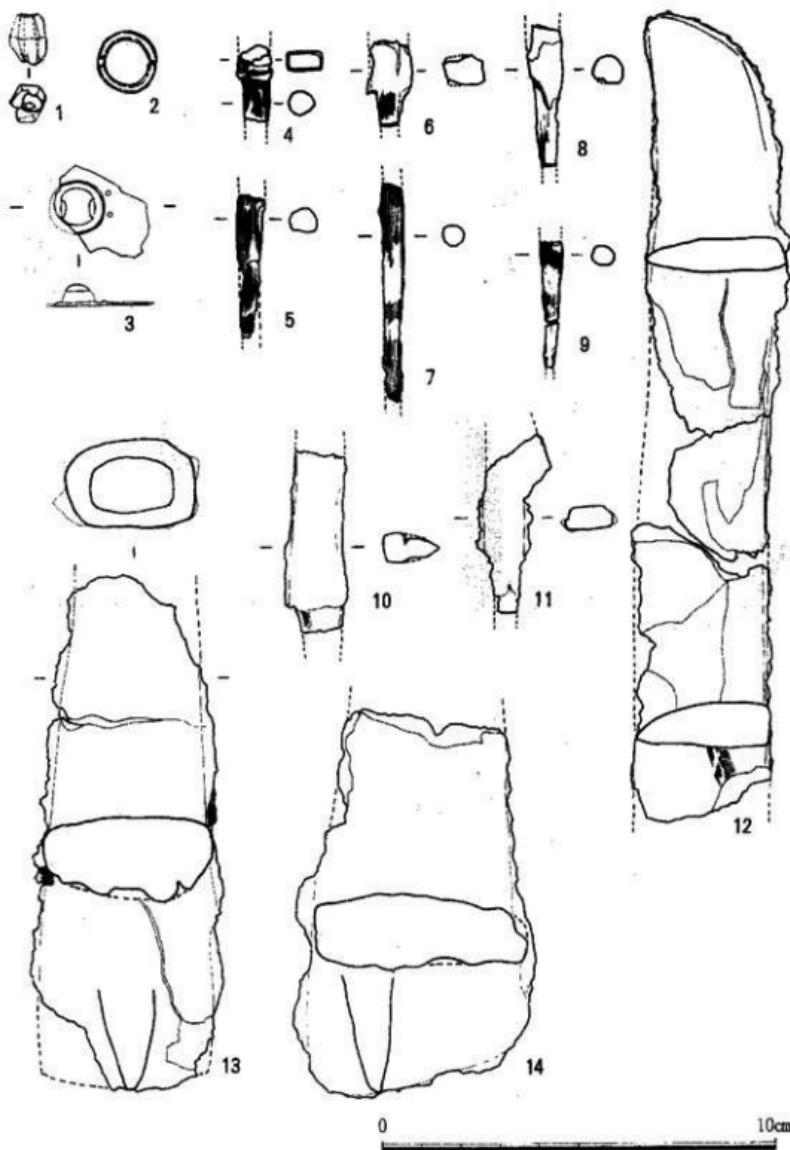
4は口径13.5cm、受部径16cmを測る。器高は不明であるが、4cm程度であろう。立ち上がりは内湾気味に立ち上がる。暗灰色を呈し、残存部分は回転ナデ調整、底部寄りの末端に、わずかに回転ヘラケズリ痕が認められる。暗灰色を呈し、焼成は良好である。

5は壺の頸部から体部にかけての破片である。頸部はやや外反気味に立ち上がっている。体部には一条の沈線を巡らせ、頸部との間には放射状に短い梯描文を施す。内外面ともにナデ調整、淡灰色を呈し、外面には淡緑色の自然釉が認められる。焼成はやや不良である。

6・7は堤瓶である。6は環状の把手をもつが、一方を欠損している。口径5.5cm、体部径13cm、器高15.7cmを測る。頸部は内傾した後外反して立ち上がり、口縁部はほぼ平坦に一



第35図 11号墳石室内出土遺物実測図(1)



第36図 11号墳石室内出土遺物実測図(2)

周する。体部はほぼ全面にカキ目を施す。青灰色を呈し、焼成は良好、堅緻である。

7は口径8.8cm、器高23.3cm、体部径20.2cmを測る。6同様に環状の把手をもつ、頸部は直立した後外反する。端部は上下に肥厚し、端部は丸くおさまる。体部は前後面とも平行タタキの上にはほぼ全面カキ目を施している。内面には同心円タタキ目が認められる。色調・焼成とともに6と近似し、青灰色で堅緻である。

第36図1は白色透明の水晶製切子玉である。一部を欠失している。長さ1.3cm、最大径0.95cm、重さ1.25gを測る。中ほどをふくらませ、両截面ともに六角形の稜をつける。穿孔は一方からで、やや傾いている。

2は耳環である。胴地であるが、金銀の被膜は残存しない。直径15mm、太さ2mm、重さ1.1gを測る。

3は珠文鏡である。紐外周に圓線1条、その外側に2個の珠文が認められる。銹化が進行しており、極めてもらい。

4～11は鉄鎌片である。4～11は木質部を残す。他に頸部細片が若干あり、総個体数は不明である。

12は鉄鎌である。銹化が著しく、亀裂が縦横に走る。基部を消失し、中程でも折れているが、細片を失っているのみで、ほぼ接合されると思われる。残存全長は20cm強である。

13・14は鉄斧である。13は袋式であるが袋部を一部消失している。現存全体13.1cmを測る。36は板状鉄斧と思われるが、基部を消失しているので、断定はできない。現存全長9.9cmを測る。

他に、本墳からはガラス小玉が2個体分出土しているが、風化により細片になっているので図化しなかった。1個は淡緑色、もう1個は濃緑色を呈する。

## (5) N-6区土器窓(別図版)

### 1. 出土状況

当グリッドの東隅を中心に、北西・南西の2方向から落ちる谷状地形を検出した。北西からはなだらかに広がりながら落ちているが、南西からのものは西側斜面にテラス状の平坦面をもつ。双方からの谷状地形の合流点は凹みをもつテラス状の地形になり、底面近くから多量の須恵器片・土師器片が出土した。須恵器は焼成不良で軟質の器種不明の体部片が最も多く、次いで器台の破片が多い。土師器は表面の剥落が著しく、やはり器種の特定は困難であるが、体部の破片らしく、壺・甕の類ではないかと思われる。

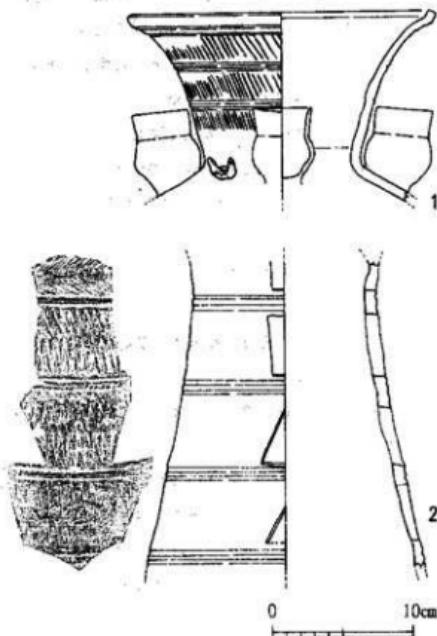
### 2. 出土遺物(第37~39図)

第37図1は装飾子持壺の肩部から口縁部にかけての破片で、 $\frac{1}{3}$ ほど残存している。口径21cm、現存高18cmを測る。口頭部はゆるやかに外反し、端部は肥厚してやや上方に屈曲する。外面に2条ずつ3段の凹線を巡らせ、間にヘラ描き斜行文を施す。内外面及び子壺の内面にまで淡緑色～淡緑色の自然釉がかかる。子壺は四方に配し、残存部分の子壺間には右向きの鳥が装飾されている。

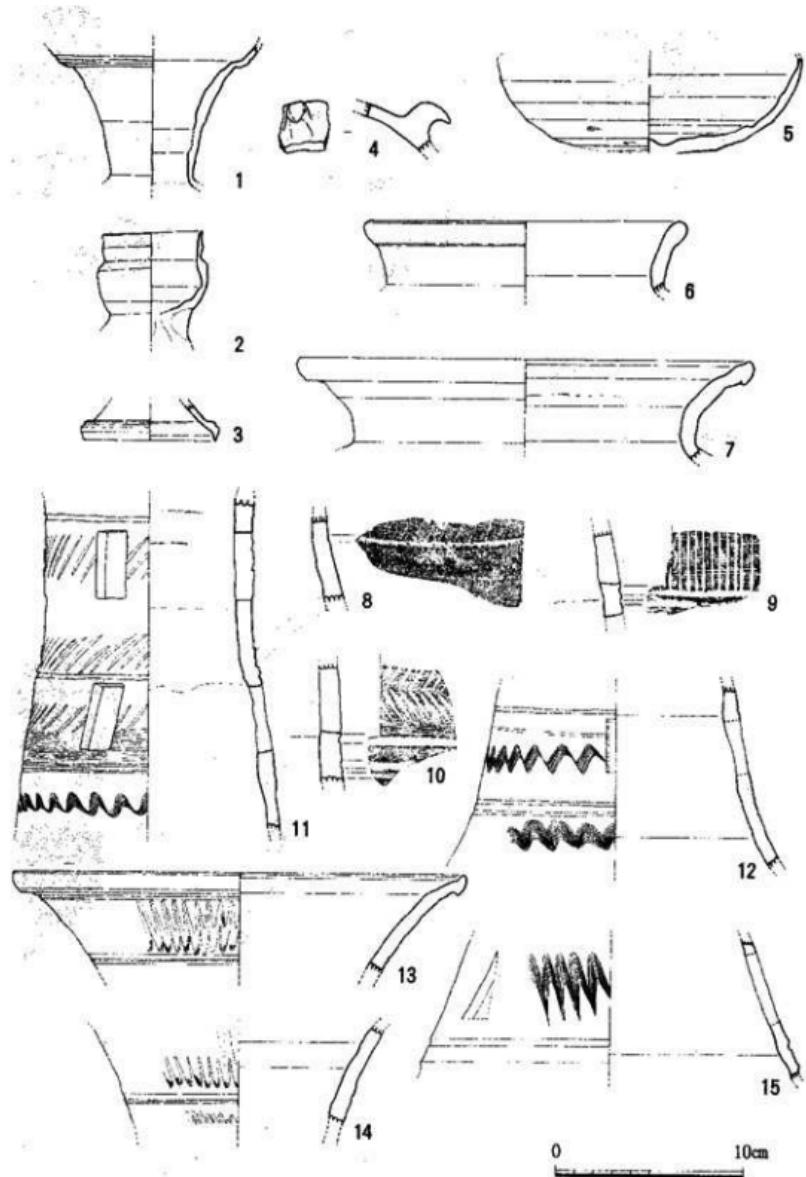
2は脚台部である。2条ずつ4段の凹線を巡らせ、上2段には長方形、下2段には三角形の透かしが入る。4方向にはほぼ並んでいるが、わずかに主軸がずれる。また最上段には2方向の斜行点文、他は波状文を施す。全体に淡緑色の自然釉が薄くかかる。現存部の高さは約22cmである。1・2ともに焼成は極めて良く、堅緻である。

1・2は同一個体として脚台付装飾子持壺を構成すると思われる。その場合の復元高は約60~65cm程度になると推定される。

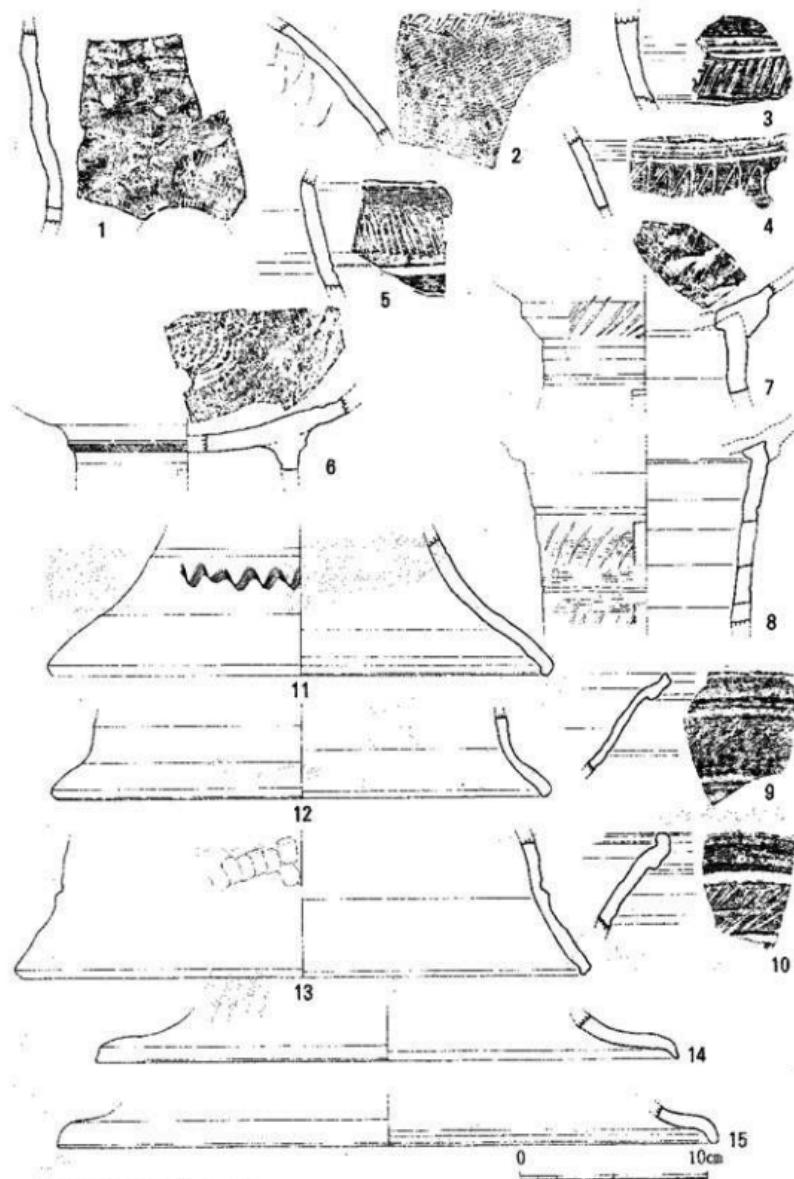
第38図1は壺の頸部から口縁部に至る部分である。端部に至る屈曲部の上に1条の凹線をもつ。2は子壺である。前述の子持壺とは別個体である。3は高壺の脚部である。端部近く



第37図 N-6区土器窓出土遺物実測図(1)



第38図 N-6区土器層出土物実測図(2)



第39図 N-6区土器窯出土遺物実測図(3)

で肥厚し、1条の凹線を施す。端部は鋭く垂直に下りる。4は提瓶の把手部分である。緑色の軸がかかる。5は壺体部の下半分である。残存部分上端の傾きから短頸壺と思われる。6・7は壺の口縁部である。6は口径16.6cmを測る。外反は小さく、端部はわずかに肥厚し、丸くおさめている。7は外反の後、外方に肥厚する。

8～12・15は器台である。8は2段の波状文と1条の凹線を施す。9は上下2段に長方形の透かしが入り、間を2条の凹線で区画する。上段の外面はカキ目の上に縦方向のヘラ描き平行線文を施す。10はカキ目の上に棘杉状のヘラ描き斜行文を施し、長方形の透かしをもつ。下方には5mm幅の凹線を2条、その下に弱い凹線を施す。11は長方形の透かしを2段、恐らく3方向に穿けている。ヘラ描き斜行文を3段、下方には波状文を施す。12は2条ずつの凹線と波状文を巡らす。長方形透かしは4方向に穿けられていると思われる。15は波状文の下に2条の凹線を巡らす。透かしは三角形、数は不明である。13は壺の口縁部、14は頸部である。13は外反した後、端部は上下に拡張する。共に凹線を巡らせ、波状文を施している。

第39図1は器種不明である。指ナデのみで成形していると思われ、指紋を明瞭に残すほどの指頭痕のため、外面ともに凸が著しい。部分的に平行タタキを施す。一部に円形透かしがあるため、器台とも考えられるが、余りにも粗雑である。2は壺の体部である。外面は細かい平行タタキの上、短い斜行文を施す。内面は板ナデである。3～5は器台であろう。3は凹線の間にヘラ描き斜行文、4は凹線の下方にカキ目、波状文を施す。6～8は器台の脚部と坏部の接合部である。6のように脚部を貼付けただけのものと、7・8のように坏部の粘土を脚部に下ろし、脚部の内面を坏部の底に延ばして組合せて接合したものとがある。6・7は接合部に斜行文を施し、4方向に長方形透かしをもつと思われる。8は凹線で区画された間に弱いカキ目・斜行文を施し、長方形透かしは4方向であろう。9・10は壺の口縁部である。9は弱くS字状に外反し、端部は外方に肥厚する。外面に波状文を施す。10は肥厚した端部をやや内側に曲げる。外面には列点文に使用する工具をわずかに回転させた施文が見られる。11～13は器台の脚部であろう。14・15は天地不明である。一般的な器台の脚端部と異なっており、口縁部の可能性もある。

## (6) 土壙群

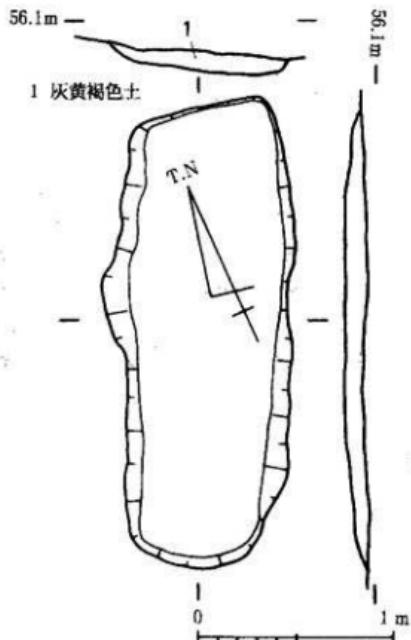
### 1. 1号土壙 (第40図)

10号墳墳丘の南裾、周溝内のテラス状の地  
面で検出した。

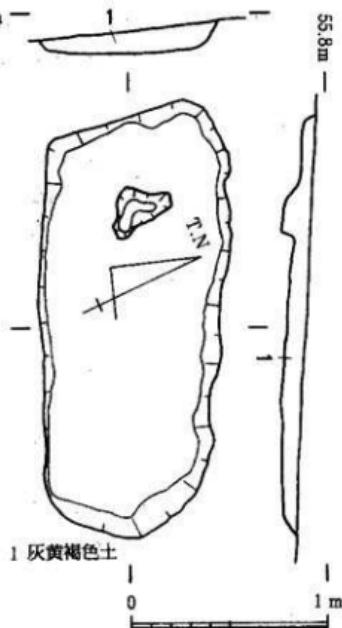
主軸はN-65°-Wにとる。2.15m×0.9m  
の歪な隅丸長方形を呈する。削平のため、深  
さは0.1mと極めて浅い。墳底の西寄りでわず  
かな凹みがあるが、木棺、石棺等の棺材の痕  
跡は認められなかった。出土遺物がないため  
時期は特定できない。

### 2. 2号土壙 (第41図)

10号墳墳丘内で、先の1号土壙と10号墳玄



第41図 2号土壙実測図



第40図 1号土壙実測図

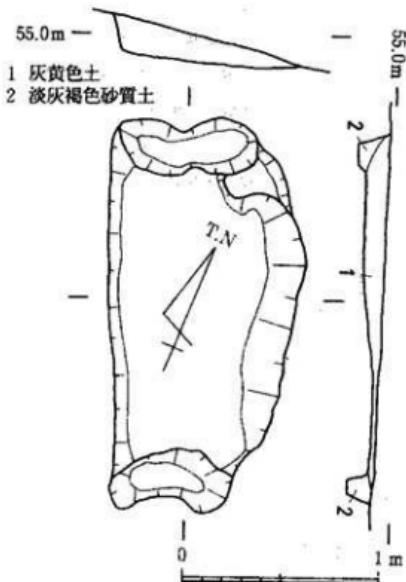
室との間に位置している。

主軸はN-25°-Eにとる。規模は2.3m  
×0.9mの歪な隅丸長方形を呈し、やはり  
削平のため、深さは0.1mしかない。1号  
土壙同様、棺材の痕跡は検出できなかつた。  
出土遺物はない。

### 3. 3号土壙 (第42図)

10号墳墳丘上、玄室の東側斜面部におい  
て検出した。

主軸はN-22°-Wにとり、センターに  
ほぼ平行している。本遺構も削平を受けて  
いる上、傾斜面のため東側長辺の掘り形は  
流れている。全長1.9mに対し、幅は北東



第42図 3号土壙実測図

隅に一部残っている掘り形と思われるう  
インから推測すると、0.95m程度と思わ  
れる。深さは西側の検出面から壙底まで  
で、0.2mを測る。壙底は水平ではなく、  
7°ほどの角度で東へ傾斜している。

南北両短辺において、棺材の掘り形を  
検出したが、棺材の痕跡は長辺でも確認  
できなかった。木棺墓であろうと思われる  
が、両短辺にのみ板石を使用した土壤  
墓の可能性もある。遺物は出土しておら  
ず、年代の決め手を欠く。

#### 4. 4号土壙

10号壙玄室奥壁の北3m、壙丘の落ち  
際で検出した。当初1～3号土壙を検出  
していない段階であり、果樹株掘り形の  
周囲に掘り込まれた施肥溝と判断してい  
たため、確認が遅れたが、1～3号土壙  
の状況や他グリッドの施肥溝の埋土等と  
の比較から、本遺構も土壤と判断した。

主軸はN-38°-Eにとる。現存長2m、幅0.75mを測る。全長は不明であるが、他との  
比較から、現存部分の2mをあまり大きくなれないと思われる。深さは0.2mである。遺  
物は出土していない。

#### 5. 5号土壙

10号壙周溝北西端の外側に隣接して検出した。周溝埋土掘下げ中に完掘したため、4号土  
壙同様、確認が遅れた。本遺構も完掘後の検討の結果、10号壙周溝に切られた土壤と判断し  
た。

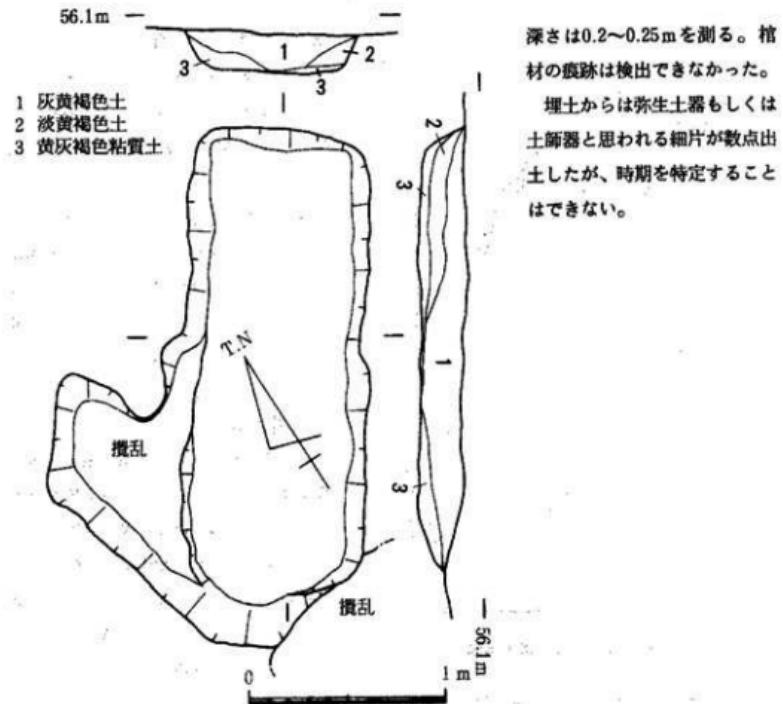
主軸はN-42°-Eにとる。北東短辺の上端は斜面で流失し、不明である。現在長2.2m、  
幅0.85mの隅丸長方形を呈する。深さは0.3mを測る。

棺材の痕跡は検出できなかった。遺物も出土していない。

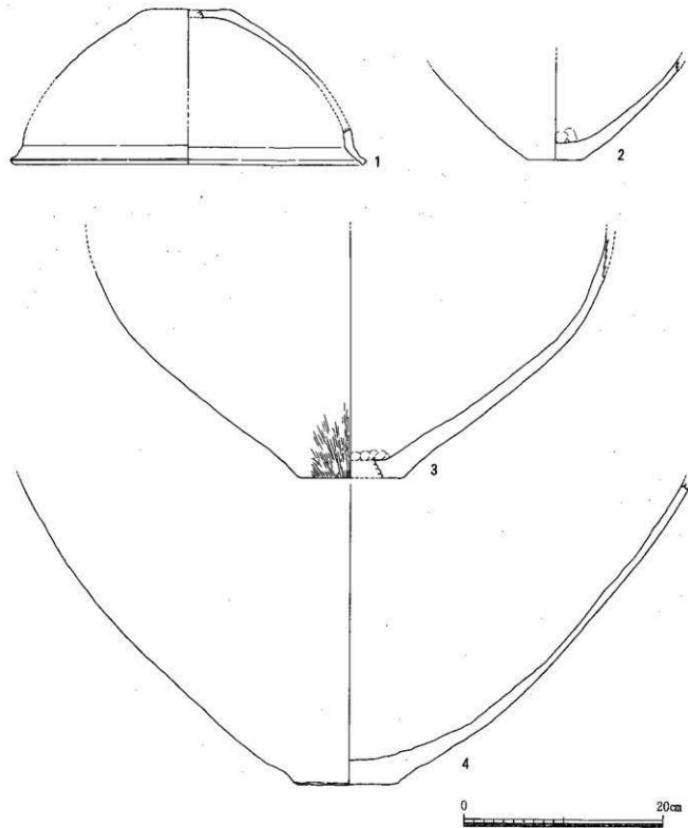
#### 6. 6号土壙（第43図）

N-3区の尾根からやや下る緩斜面部において検出した。南側と東側に擾乱を受けている  
が、壙底には影響は及んでいない。

主軸はN-33°-Eにとる。現存部分の長さは2.35m、幅は0.9mの隅丸長方形を呈する。



第43図 6号土壤実測図



第44図 S-4区土器棺実測図

(7) 土器棺 (第44・45図)

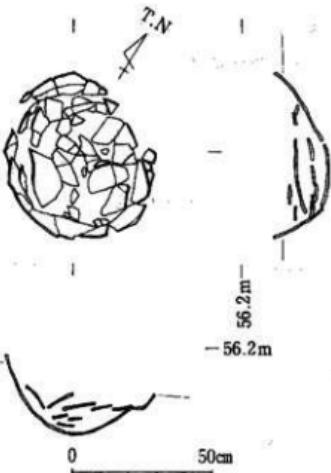
S-4区北東向き斜面において、重機による表土除去の過程で土器棺を検出した。

開墾による削平のため、体部下方 $\frac{1}{3}$ 程度残存するのみであり、上記の状況下での出土により、掘り形は確認できなかった。樹木根が貫通しており、残存状態は良好とはいえない。主軸の傾きの角度、方位も確定し得なかったが、概ねセンターに平行の北西に向かっていると推察される。埋土は澁黄灰褐色である。

土器（第44図4）は、底径10.3cm、器高30.7cmまで復原できたが、体部最大径部分にまでは至らない。橙褐色を呈し、焼成はやや不良であり、表面の剥落が著しく、調整は観察できない。

他にS-3区では、表土除去の際に重機で移動中の排土から土器棺と考えられる弥生土器片が3個体分出土した。出土位置から1と3が蓋と棺身にセットで使用された鉢形土器と壺形土器であろう。1は復原口径35.2cm、器高15.6cmを測る。3は底径10.5cm、器高25cmまで残る。いずれも橙褐色を呈し、表面の剥落が著しいため、調整は不明な点が多い。3の底部は外面に縦方向のヘラミガキ、内面に指頭痕が認められる。2は底径5.3cm、器高10.3cm残存する。暗黄灰褐色を呈し、底部内面に指頭痕を残す。

以上の土器は弥生時代後期末の所産と考えられる。



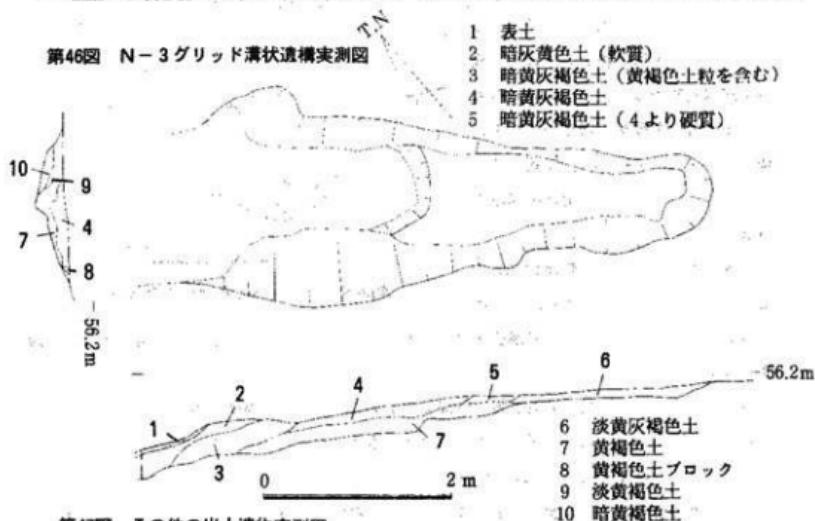
第45図 S-4区土器棺出土状況図

(8) その他の遺構と遺物 (第46・47図)

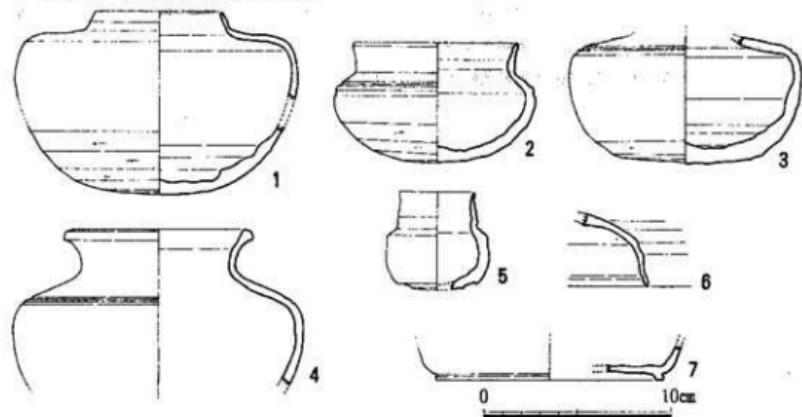
1. 溝状遺構

N-3区において検出した。主軸をN-49°-Wにとり、北西向きの斜面で、谷状に広がりながら下っている。急斜面に至るまでの延長6m分を精査した。上方で幅約1m、深さ10cm、底は平坦である。3mほど下った地点で1段落ち、下方では幅2m、深さ25~30cmを測る。埋土から須恵器の壺身が一点出土している(第47図7)。底径12cmを測る。やや堵張り気味

第46図 N-3グリッド溝状遺構実測図



第47図 その他の出土遺物実測図



の高台をもち、丸みをもって立ち上がる。8世紀初頭と考えられる。遺構の性格は不明である。

## 2. S-2区土器窯

S-2グリッドの北端にあり、先述のN-6土器窯の遺構と一連のものとも考えられるが、遺物の集中する地点が互いに10m離れているため、別々に扱った。

図化できたのは第47図1～3の短頸壺と4の小型壺で、他は細片ばかりである。1は口径6.7cm、体部最大径15cm、推定器高9.8cmである。頸部は内傾している。肩部は水平に近く張る。暗青灰色を呈し、焼成は良好である。2は口径8.4cm、体部最大径10.2cm、器高6.4cmを測る。体部上方に2条の凹線を施す。外面は淡黄土色、内面暗灰黒色を呈し、焼成はやや不良である。3は口縁部を欠く。最大幅12.4cm、現存器高6.8cmを測る。体部上方に凹線を2条施している。淡灰白色を呈し、焼成は不良である。4は底部を欠損している。口径9cm、体部最大径15.4cm、現在器高8.3cmを測る。口縁部は丸く外反し、端部は外方に肥厚する。体部上方に2条の凹線を施す。淡灰茶色を呈し、焼成はやや不良である。

他の器種の状況が不明であるが、上記の一括遺物は概ね6世紀後半と考えられる。

## 3. その他

第47図5はN-4区の6号土壙を一部切っている擾乱部分から出土した。子持壺の子壺である。青灰色を呈し、焼成は良好である。N-6区土器窯出土のものとは別個体である。

6は同じくN-4区において精査中に出土した环蓋である。6世紀中葉であろう。

## 第4章 まとめ

今回の調査では、5号墳・10号墳・11号墳の3基の古墳及び土壙群、弥生時代の土器棺墓を検出することができた。

5号墳は最も破壊が著しく、墳丘が完全に削平されて、形状や規模が不明であるばかりか、石室を構築する石材が殆ど抜き取られ、敷石もその多くが攪乱を受けていた。しかし、石室の掘り形や根石の痕跡から、玄室の全長約3.6m、最大幅1.8m、羨道の長さ2.3m、幅0.7~0.8mの、主軸をN-42°-Eに取り、ほぼ南西に開口する横穴式石室を主体部にもつことが明らかになった。また、墳丘についても、周囲の地山への加工状況から、直径約15mの円墳ではないかと推定できる。

出土遺物は、須恵器2点の他は馬具を始め鐵鎌・玉類・紡錘車等が若干出土したのみで、本墳の築造時期を推定する材料が乏しい。わずかな須恵器から6世後半と考えられるが、追葬の有無（もしくは、この須恵器が追葬時のものか）は判断し得ない。

10号墳は、3基の中では最も遺存状態が良好で、土器溜を伴う周溝、墓道をも検出できた。玄室も開墾により上部が破壊されただけで、副葬品も豊富に残り、あくまでも開墾目的であって盗掘目的の破壊でないことを窺える。

主体部は、主軸をN-7°-Wにとり、3基中唯一ほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室である。石室規模は、玄室全長3.05m、最大幅2m、羨道全長2.2m、幅0.85~0.95mを測る。

出土遺物は、玄室からは先述のとおり多種多量の須恵器と若干の土師器及び玉類・紡錘車・铁鎌・鍔先・鐵鎌などが出土した。中でも特徴的な点は、玄室内からは須恵器环身が1点も出土せず（环蓋は4点）、墓道で底から浮いた状態で、やや古い様相を示す破片を含みつつも、主として6世紀末葉に近い時期の环蓋・环身がまとまって出土したことである。玄室からは、脚付長頸壺、直口壺、壺、短頸壺、提瓶、平瓶など、壺系統の須恵器が大半を占めており、先述の墓道からの出土遺物の状況を考え合わせて、埋葬以後の2次的な作為が推測される。

出土須恵器は、ほぼ6世紀末葉を中心とした時期と考えられる。周溝からの出土須恵器を考慮に入れても、まず妥当であろう。

11号墳もまた、墳丘を開墾・削平により失っている。調査中、近隣在住の発掘作業協力者の記憶によると、開墾前は、本11号墳とその先の5号墳との間に溝があったと言う。あるいは両墳いずれかの周溝の一部であったのかもしれない。このことは、先述の10号墳の周溝において、地表下に地山と同質の土が堆積していたことからもうなづける点であろう。

11号墳もまた、石室の基底石の一部が残るだけではあったが、若干の須恵器（环蓋、身のセット）、铁鎌、珠文鏡などが出土し、埋葬時期を推定する資料を得ることができた。

主体部は、N-42.5°-Eと、5号墳とは主軸を平行にとる横穴式石室であり、その規模は、

玄室全長約2.5m最大幅約1.8m、羨道全長1.9m、幅1mを測る。出土須恵器から6世紀後半の早い段階と、3基のうちでは最初に築造された古墳であろうと推察される。

これら1尾根上の3基ということから、基部に位置する11号墳を最古と考えると、11号墳→5号墳→10号墳という築造順を、強引ながら与えることが可能であるが、5号墳の須恵器が少ないとから、5号墳と10号墳との前後関係はあくまでも仮定に留めておきたい。

以上の3基のほか、5号墳の背後、尾根の屈曲部分で検出したテラス状構造での特殊な須恵器の集中する土器層の検出も注目できる。装飾付子持壺などの須恵器から6世紀後半の時期が考えられるが、これらと古墳との関係について検討する材料に乏しく、今後の課題としたい。

また、尾根の基部で検出した土器棺墓及び10号墳周辺における土壙群も、古墳構造以前の当該地の墓制を考える上で新しい資料となり得た。土器棺墓は弥生時代後期末頃、土壙群は10号墳墳丘盛土が削平され、さらに地山が均一な面に削られてもなおその掘り形を残すことから、少なくともその大半は10号墳築造以前の所産と推察されている。

これらの成果から、今後への問題点を幾つか提示してみたい。

- ① まず、今回の3基の古墳と近隣の母神山古墳群との関連性を指摘すると、母神山古墳群のうちの幾つかが玄室にわずかな胴張りを持ち、10号墳のように床面に二重敷石が施されているなど、石室構築上の共通点が見られる。また、11号墳のように羨道部前方で地山が高くなり、かつ排水施設を持たない構造になっていることも上母神4号墳と共通しており興味深い。
- ② 今回の調査で5・10号墳から合計3点の紡錘車が出土した。滑石製とされるものが多い紡錘車であるが、この3点はいずれも蛇紋岩製であることが明らかになった。蛇紋岩は、近くでは愛媛県宇摩郡土居町東赤石山系及び同山を水源とする関川流域で採集されるということである。あくまでも原石の産出地であって、加工された製品についてのデータはないが、今後、母神山古墳群で多く出土している紡錘車についても、原産地及びその流通について、他の遺物をも含め東予地方との関係を検討する必要があろう。
- ③ 赤岡山古墳群が6世紀全般にわたり築造されていたことを考え合わせると、これに統く古墳が、扇状地上のいわゆる大野原古墳群（盟主墳たる椀貸塚古墳、平塚古墳、角塚古墳や、小森塚古墳群、宗像古墳、道下古墳群などの小古墳群）と、南方丘陵上の縁塚古墳群などに立地上二分される。

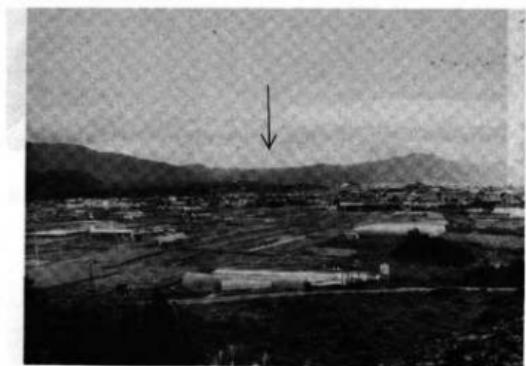
しかし、扇状地上の勢力の系譜が、当時の海岸線近くに立地する7世紀前半築造の埴輪古墳や7世紀末葉築造の靈岡古墳——いずれも方墳——の被葬者と関連づける可能性があるのに對し、丘陵上の古墳群には6世紀末～7世紀初頭に築造・追葬が認められるものが多いが、それ以降に新たに築造されたものは調査例が少ないとあるが確認されていない。これらのことから、古墳群の築造場所の差異が、被葬者集団の性格の違いを検討する手がかりになるのではないだろうか。

以上、極めて羅列的であって、本古墳群についてはもっと十分な検討がなされるべきであるが、第2・3次調査における予想以上の大きな成果も本書に統いて報告されることもあり、それらを総合的に検討した上で、別の機会に考察したいと考える。

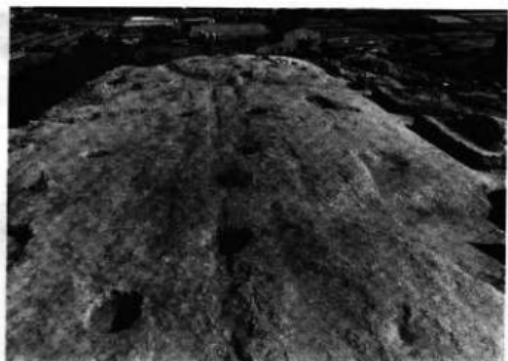
最後に、従来県下各地の市・町史その他の郷土資料に記載されている小古墳群の多くについて、「開墾により消滅」という表現がなされているが、近年の大型重機による開発は別として、旧来の人力を中心とした開墾においては、縄塚古墳群のように、墳丘は削平されてもなお遺構と若干の遺物がかろうじて残存し、各地域の小規模共同体首長層の消長を考えるデータを得る可能性のあることが明らかになった。今後いっそう進行すると予想される中・大規模開発に際しては、上記の可能性を十分に考慮して対応する必要があろう。

#### 参考文献

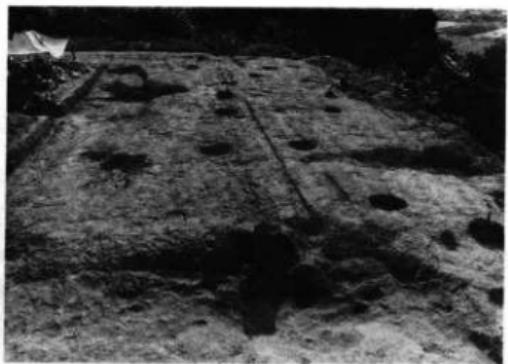
- 註(1) 5号墳も同様である可能性がある。
- 註(2) 真鍋昌宏『上母神第4号墳発掘調査報告書』上母神古墳群発掘調査団 1978・9
- 註(3) 香川大学教育学部谷山謙教授（地質鉱物学）の御教示による。
- 註(4) 高橋邦彦『埴穴塚発掘調査報告書』大野原町教育委員会 1989・5
- 註(5) 國木健司『雲岡古墳発掘調査報告書』豊浜町教育委員会 1987・9



1. 調査区遠景（北から）



2. N区全景（南西から）



3. N区全景（北東から）

図版2



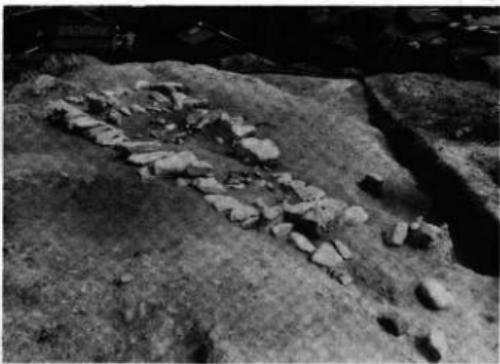
1. 5号墳主体部検出状況



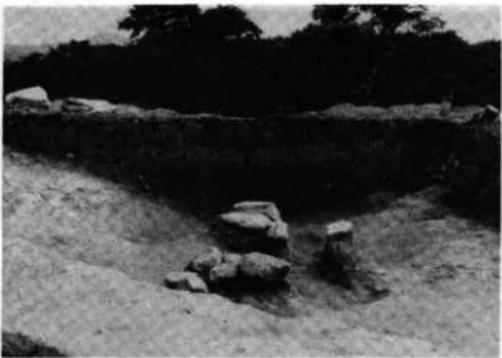
2. 5号墳石室全景（南から）



3. 5号墳石室全景（南東から）



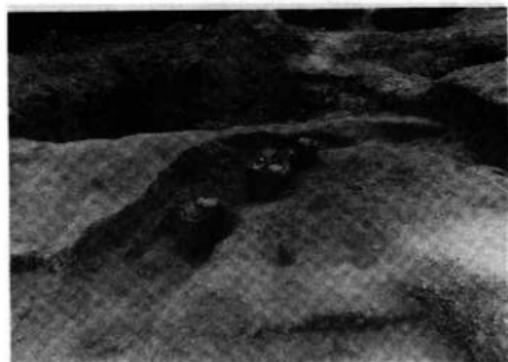
1. 10号墳石室検出状況



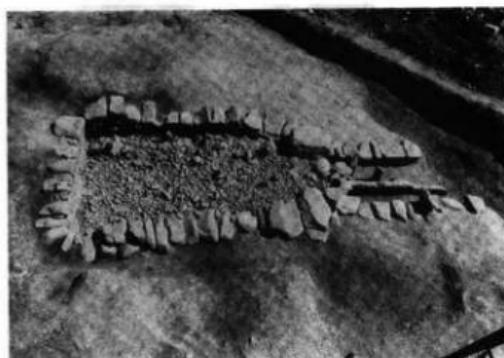
2. 10号墳周溝土層出土



3. 10号墳周溝土器溜出土



1. 10号墳墓道



2. 10号墳石室内遺物  
出土状況(1)



3. 10号墳石室内遺物  
出土状況(2)

1. 10号墳玄門部遺物

出土状況 実測出目



2. 10号墳石室全景（西から）



3. 同上（下層敷石検出後）





1. 10号墳石室基底石

検出状況



2. 10号墳玄室東側壁

(敷石除去後)



3. 10号墳玄室東側壁

(切石使用部分)



1. 10号填玄室西侧壁



2. 10号填玄室奥壁



3. 10号填羡道西侧壁

図版 8



1. 11号墳石室全景（西から）



2. 11号墳羨道



3. 11号墳玄室内遺物  
出土状況

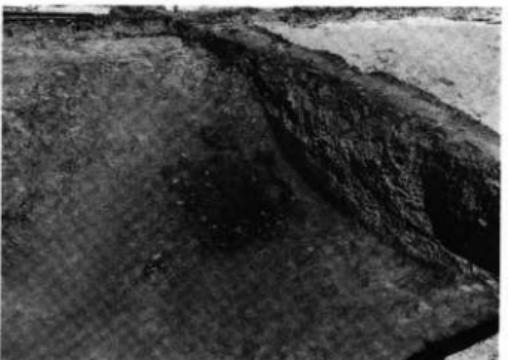


1. 11号墳石室全景（南東から）



2. 11号墳掘り形

（5号墳を遠望）



3. N-6区土器溜

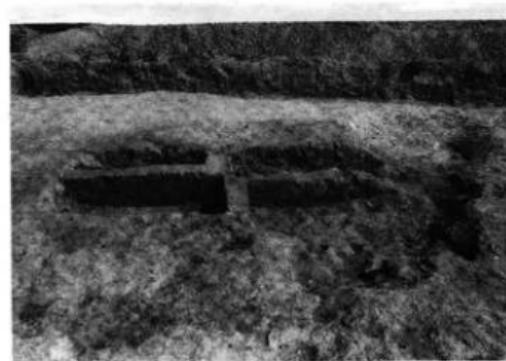
図版10



1. 1号土壤（北から）



2. 2号土壤（東から）



3. 6号土壤（北西から）

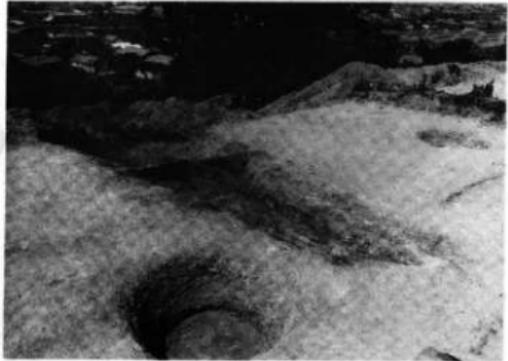
1. 土器棺検出状況



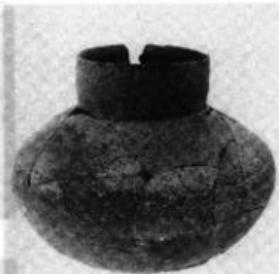
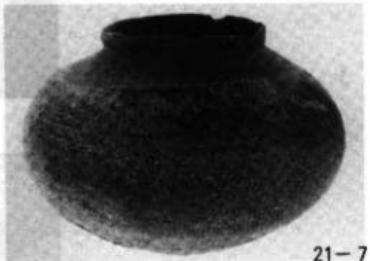
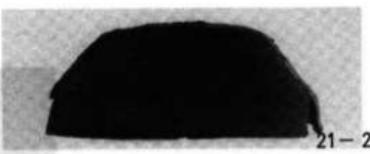
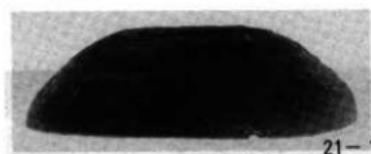
2. 同上（埋土除去後）



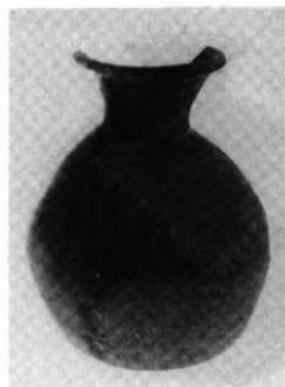
3. N-3区溝状遺構



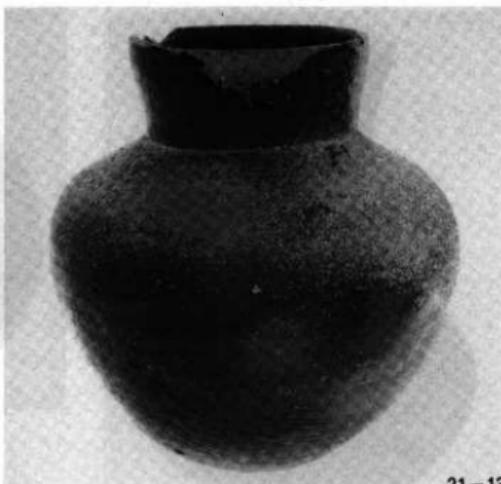
図版12 出土遺物(1)



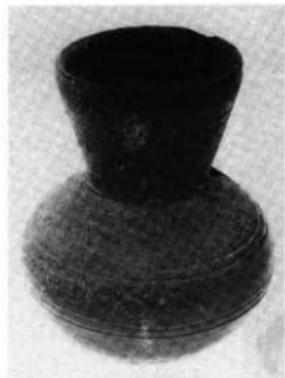
図版13 出土遺物(2)



21-9



21-13



21-10



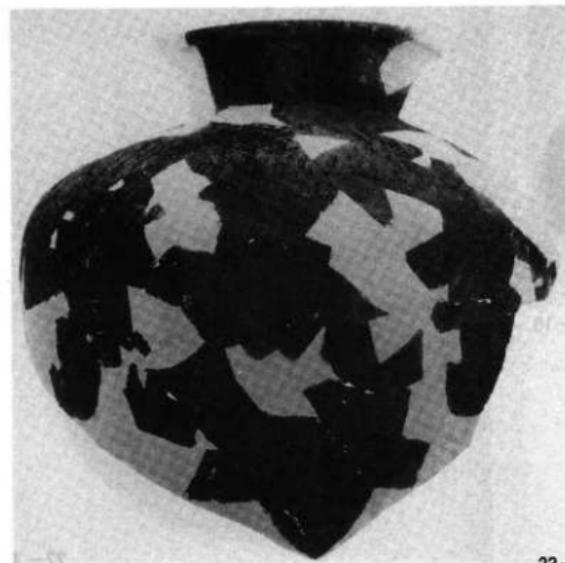
22-4

図版14 出土遺物(3)



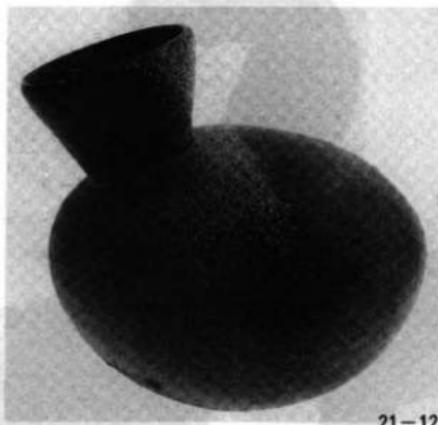
22-3

22-1



23-9

図版15 出土遺物(4)

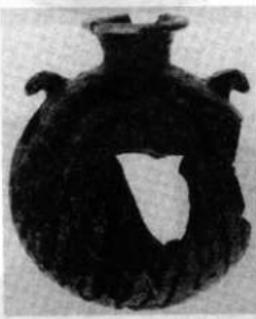


図版16 出土遺物(5)

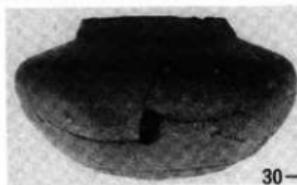


30-8

30-5



31-2



30-9



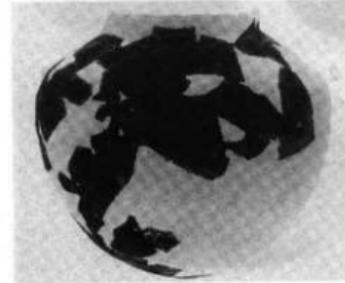
30-3



30-13



31-1



32-1



32-2

図版17 出土遺物(6)



32-4



32-3



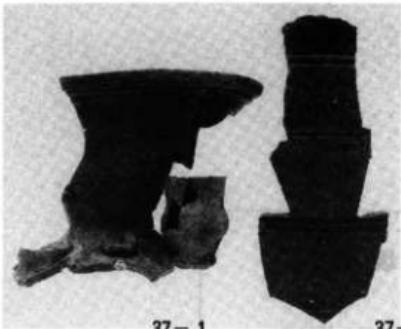
18-1



35-12



35-5



37-1

37-2



35-6



44-3

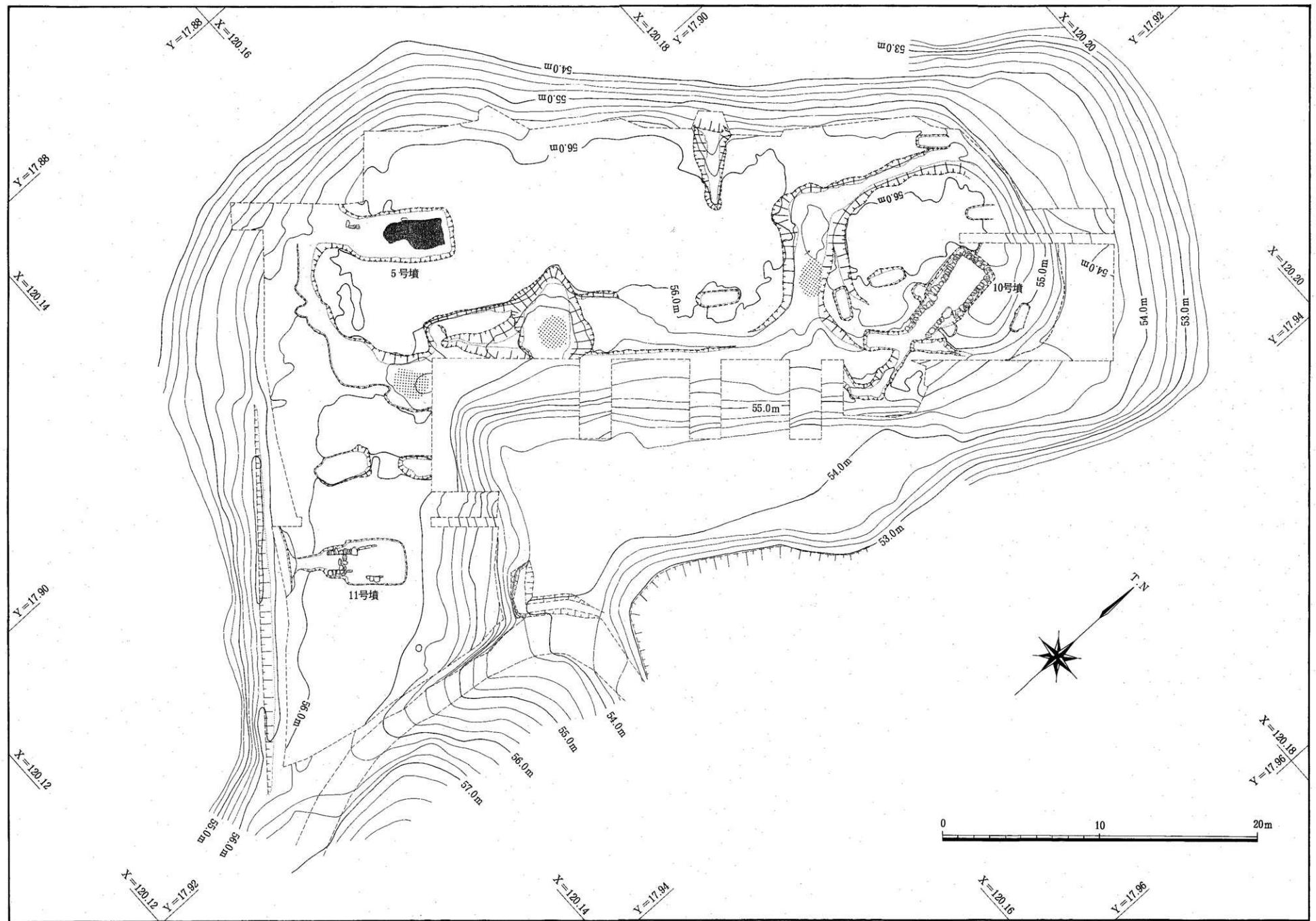
## 縁塚古墳群 1

発行日 平成3年3月31日

編集・発行 大野原町教育委員会

香川県三豊郡大野原町  
大字大野原1260-1

印 刷 ㈲有明高速印刷



付図 縁塚古墳群 第1次調査遺構配置図(アミ部分・土器窯)